



駒.zone

2012
4
Forth

目次

将棋短歌 半島・題詠

七割未満 (四) 清水らくは

指定局面 しゅう

駒とおむすびとペンギン 半島

Love and hate (inspired by Osamu Dazai's " Kakekomi uttstae ") shogitygoo

対コンピュータ二手目6二玉戦法 ikkn

ふれあう将棋 ふりごま

駒箱の鍵 清水らくは

神様とミルフィーユ 清水らくは

一般棋士2.0 清水らくは

将棋一短歌 往復書簡 半島・跳馬

お城はあきた 清水らくは

月子のチェス日記「チェ的」 金本月子

エクストリーム・詰将棋 跳馬・清水らくは

短歌将棋 にゃんこむすめ・皆川許心

あとがき

作者紹介



駒. zone



つつむように桂馬をさわる爺ちゃんはまた6月の麦をかりとる

かなわない駒うばいとる姉ちゃんのそのへビイチゴひきちぎる指

たらの芽のてんぷらを食う夕がたにまた友だちが将棋をやめた

やけついた群肝の底たまる滓（おり）おしながすたび指がふるえる

なにもかも奪い取られた戦歴をきょう大空へかえすさびしさ

半島

題詠

お題

盤上に愛はあるかと問うてみた

例

盤上に愛はあるかと問うてみただけどお前は子猫みたいだ(半島)

盤上に愛はあるかと問うてみた将棋ソフトはやっぱり無言(落波)

盤上に愛はあるかと問うてみた康市に訊けば判ると云われた(跳馬)

ワタクシ勉強不足デ康市ガ誰カワカリマセン.....が、この歌から察するに相当愛についてく詳しい方と思われます。名著『愛するということ』を書いた方にちなみ、エーリッヒ・フカウラとでも名付ければいいでしょうか。ちなみに私は盤上に愛を感じません。気付くといつも私の玉が頓死しています。死体を愛する傾向は私にはないのです.....(何でもないようなことが落波)

盤上に愛はあるかと問うてみた。中合いされて袖にされ(にゃんこ)

あの卒業式の後、俺は伝説の木の下に呼び出された。告白が成就したカップルは永遠に幸せになる、そんな伝説のある木に.....。彼女は将棋とチェスがうまい、ちょっと茶目っけのある女の子だ。一か月前までは、将棋部でよくからかわれたものだ。一一木の下にたどりつく。だが彼女はいない。目を落とすとそこには一枚の手紙が置かれていた。そこには.....ただ一言。

「ばーか」と丸っこい字で書かれていた”という歌だと理解しました。

(ときめき半島)



清水らくは

対局ボードを、じっと見る。今日は順位戦以外は組まれていない。それでもC級二組とあって、ずらっと名前が並んでいる。この中でC級一組に上がれるのはたった三人。いや、関西の方でも対局しているから、実際はもっと少ないかもしれない。

ついでにほかの部屋も見る。ふと、見知った顔がいることに気が付いた。部屋の奥で記録を取っているのは、水色のカーディガンを着た皆川さんである。姉弟子が記録係をしているのは、今まで見たことがない。もちろん知らないところではしていたかもしれないし、他の女流棋士がどれぐらいとっているものかもよくわからない。ただ、いつもとどこか様子が違うように見える。頬はいつもより自然に近い肌色だし、唇も赤くない。座っている時に机をコツコツと叩く癖があるのだが、いま彼女の手首はしっかりと固定されている。

あんなに落ち着いた人だっただろうか。

先日の敗戦が、相当こたえたのかもしれない。俺の見立てでは、つっこちゃんはすでに有段者ぐらいの棋力があると思う。しかし、奨励会の級位者に負けたという事実は変わらないのだ。プロとして戦っている以上、気分がいいはずがない。

戦っているのは対局者だけではない、ということかもしれない。ただ、今日は他人に感心している暇などないのだ。

対局室に戻る。部屋の空気が体中を刺してくるようだった。

「なんで、見えるの！」

ある時、彼女が突然声を荒げた。たぶん俺は、ものすごくポカーンとしていたと思う。

「いや、まあ……なんでだろう」

今よりもずっと幼かった俺は、適切な回答がわからなかった。俺よりも少し大人な彼女の方に、なんとかして折れてもらえればと思った。

一度だけ、先輩に誘われてハイキングに行ったことがあった。まだ奨励会に入って間もない俺は、当たり障りのない断り方を知らずに参加することになってしまったのだ。そして将棋の集まりなので、どこでも将棋を指そうとする。昼食を採った後、俺は皆川さんと一局指すことになった。大自然の中で。

内容は一方的だった。棋力差があったのだ、仕方がない。そして感想戦の途中、彼女はその言葉を発した。

見える人と見えない人がいるのか、努力の差なのか。当時は考えてもわからなかった。ただ少なくとも、将棋しかすることのない自分の方が「強くて当たり前」だと思っていた。どれだけ皆川さんが頑張っているのか、悩んでいるのか知っていたら、はっきりと答えは出せただろう。才能の差があるから、と。

傷付けることになったかもしれない。けれども、努力でどうにかなると夢見ることは、甘えにつながる。才能がないなりのやり方というのがあるのだ。

今度聞かれたら、はっきりと言おう。それで嫌われるような関係ではないと思う。

気が付くと、昔のことを思い出すほどに形勢が開いていた。

どうしてこうなったのかはわからない。ただ、川崎さんにはいつもこうやってやられてきた。「何で見えるのか」あの時の皆川さんと同じように、心の中では叫びたがっている。俺には見えない道筋を、いとも簡単に見つけている気がする。顔つきはまったく変わらず、持ち時間が減っても焦った様子など一切見せない。こちらが思うほどには、俺のことなど意識していないのだろう。

ただ、諦めはしない。どんなに泥臭くても、勝たなければならない。川崎さんにだけは置いて行かれるわけにはいかない。

頭が沸騰しているかのようなだった。湯呑みに水を注ぎ、一気に飲み干した。ポケットからチョコレートを取り出し、口に放り込む。甘さより苦さの方が感じられる。

向こうで、終わった対局があるようで、すっと立ち上がったスーツのシルエットが目飛び込んでくる。せっかくいいものを着こなしていたのに、この時間になったらよれよれだ。

その前に、机に向かってびしっと背筋を伸ばしたままの記録係がいる。俺より若いけれど、彼の服はとてもしっかりしたものだ。きっと親がきちんと選んでいるのだろう。紺のポロシャツの襟元には、細いオレンジのラインが入っている。しかもそれを目立たせるのではなく、ちらりと見えるぐらいに襟を寝かせている。いいと思う。

将棋に関係ないことが、きっちりと見える。冷静なのか集中できていないのか、よくわからない状態だった。そして、恐ろしいほどの勝負手を思いついた。香車でももったいないような犠打を、飛車で代用する手だ。それでよくなるのかではないけれど、局面の情勢は変化する。こちらの方に攻める手番が回ってきやすくなるはずだ。

躊躇している余裕はない。飛車を、力いっぱい打ち付けた。

けれども、すぐに絶望に襲われることになる。俺が手を離すとき、すでに川崎さんの手は駒台

に伸びていた。よどみなく、流れるような手つきで桂馬が置かれる。

……読んでいたのだ。飛車打ちを。

桂馬はただで取れる虚空に置かれた。取らなければ拠点となってしまう、厳しい桂打ち。そして取れば、歩の数が足りるので先手で叩かれて飛車は無力化する。

やられた。完全に読み負けた。そして終盤では、致命傷になるほどの失敗だった。

何より悔しいのは、俺が筋悪な勝負手を指すことまで読み切られていたことだ。完全に踊らされているということじゃないか。

どうしようもなくなった。

形作りに入った。悔しいが、せめてもの意地だった。

零時前、対局は終わった。川崎さんは一切表情を変えなかった。感想戦も、淡々と行われた。そして、どの局面でも読み負けていた。

順位戦的には、まだ一敗だ。けれども、二人の距離は、とてつもなく開いてしまっていた。勝率も、七割未満になった。

このまま、川崎さんは遠くに行ってしまうかもしれない。タイトル挑戦ぐらい、しても驚かない。けれども、才能の差とかで納得できるほど、俺は理性的じゃない。将棋しかない。俺には将棋しかないから。

部屋を出て、控室に向かう。大人なら飲みに行ったりするんだらうけど、俺には深夜の街ですることなど何もない。悔しくて仕方がないのに、それを顔に出す技術もない。いつもと同じように将棋を見て、考えて、ため息をつくことしかできない。

検討に加わったり、関西の対局をチェックしたりしながらしていたら、一時半になっていた。こうなるともう、帰ることも億劫になる。どうせならどこか千日手にでもなって、朝まで対局したりしないだろうか。

しかしそんな都合よくも行かない。全ての対局が終わった。感想戦でも見に行こうかと、部屋を出た。

「辻村」

突然名前を呼ばれた。振り返ると、そこには皆川さんがいた。

「どうしたんですか」

「記録終わったから。辻村こそまだいたんだ」

「俺、勉強熱心だから」

「で、まだいるの」

「え」

「今から帰るなら、送ってってくれてもいいかな、と思って」

時間も時間だ。確かに女性を一人で帰らせるわけにはいかない……と考えるのが大人への第一歩だと誰かが言った。今回は彼女の師匠に挨拶するというハプニングもないだろう。

「なんだ、辻村君奥さんと待ち合わせしてたのか」

検討に残っていた先生に軽口を言われるが、軽く会釈で受け流す。

「行きましようか」

「えらく素直ね」

本当は、助かったと思っていた。今は将棋に全く集中できる気がしない。俺らは、並んで会館を後にする。

「考えてみたら変ですよ。女性と高校生が普通にこんな時間までって」

「高校なんて行ってないじゃない。まあでも、変な感じではあるかな」

「皆川さんは……迷ったりしませんでしたか」

自分でも様子がおかしいのはわかっていた。心が落ち着かなくて、饒舌になってしまう。不安なのか、怖いのか、とにかく自分のことを忘れたい気分だった。

「何に？」

「棋士として……やっていくこととか。大学に行くとか……会社に就職する先輩もいるわけで……」

「迷うよ」

きっぱりとした口調だった。思わず俺は歩みを止める。街の光と星明りに照らされて、茶色い髪がピカピカに輝いて見えた。

「将棋は好きだけど……それだけじゃやっていけないから」

「好きなものをはっきり好きって言えるのは、すごいと思います」

皆川さんも歩みを止め、こちらを振り向いた。笑ったような困ったような、何とも言えない妙な表情をしていた。

「言えることばかりじゃないんだよ」

「でも俺は、好きなのかどうかも分からなくなる時があります」

「川崎君に負けたから、将棋を嫌いになるの？」

心臓を生け捕りにされたようだった。それは、確かなようで全然違うことだった。川崎さんには負けたくない。負けたくなかった。けれどもそれと将棋が好きかどうかとは、関係ない。自分にとって将棋は、好きとか嫌いとか、そういうものじゃない。やってみたら強くなった。強かったらプロになれる。プロになったら……居場所がある。

「俺、そういうことよくわかんないんです」

「心配」

「え」

「辻村って、将棋以外ふわふわしてる。それなのに、そういうところあんまり見せないよね」

「そんなことないですよ」

「あるよ。わかるの……えーと……姉弟子だから」

「そんなもんですか」

悪い気はしなかった。少なくとも、自分のことをよく知っている人が一人はいるというのは、安心できる。孤独に慣れることはできても、孤独が好きなわけではない。

「そんなもんよ」

「じゃあこれからも、何か気付いたら教えてくださいね」

「そ、そうね。そうする」

一人で帰っていたら、ただただ暗い気持ちだっただろう。今の俺は、決して前向きに離れないけれど、愛想笑いぐらいはできる。

姉弟子に感謝しなければならないだろう。

初めて、会館で研究会をすることになった。しかも自分以外の三人は奨励会員である。

話の発端は数か月前にさかのぼる。順位戦開幕局で関西を訪れたとき、三東先生と昼食を食べる機会があった。その時につっこちゃんと仲良くしてくれ、と言われたのだ。師匠にそう言われるのはお墨付きを貰えたようで嬉しいが、監視されているような気もしないでもない。しばらく具体的には何もできずにいた。

それで先日会館で偶然つっこちゃんに会った時に話をしたら、その場にいた他の奨励会と共に「研究会をお願いします」と言われた。積極的だったのは主につっこちゃん以外の二人だけど、彼女自身Bをとったりして悩んでいるようだった。

現れたつっこちゃんは今まで通りかわいかったが、少し服が窮屈そうに見えた。たぶん本人が成長したのだろう。三東先生は鈍感そうだから、つっこちゃんのために新しい服を買ってあげるなどはしないんじゃないだろうか。

他の二人はよく知らない。記録などで顔は見ている気もするけど、奨励会の時期が重なっていない子はわからないのだ。ただ、目が輝いていて、なんだか眩しい。たぶん自分にはそういう時期がなかった。

「辻村先生に教わって見たかったです！」

そうやってきたのは魚田6級。うおたくん、と言ったら「さかなだです！」と元気に訂正された。ファミリアというあだ名らしい。

「声おっきいんだよ」

もう一人は関川4級。体格ががっしりとしていて、声も野太い。こちらのあだ名はせっきー。普通だ。

つっこちゃんはほとんど黙ったまま、ちょこんと座っている。人と話すきっかけのつかみ方を知らない、という感じだ。

「とりあえず始めようか」

なにはともあれ実戦から。俺対ファミリア、せっきー対つっこちゃん、対局を始める。持ち時間なしの20秒。これは俺が初めて習った先生が好んでいた時間であり、また実戦にない設定でどこまで指せるのかを見たい、という意図もあった。

ファミリアは中飛車党のようで、力強い手つきでがんがん指し進めてきた。一手3秒ぐらいで指してくる。こちらもそこそ早く指すのだが、手が交差してぶつかりそうになることもある。天性の早見えのかもしれないが、いずれ大きな壁にぶつかってしまうタイプだ。

中盤ですでにほころびが生じているが、本人は気付いていない。級位者同士なら苦にならない差なのかもしれない。けれどもプロを目指すのならば、決定的な差だった。そして現状終盤力もちちらの方が強いから、まったく話にならなかった。完封だ。

「もう少し作りを考えないとね。終盤力は、いつか武器じゃなくて防具になるんだよ」

「防具？」

「今はまくって勝てるけど、いずれはそれが無いとどうしようもない状況になる。逆に言えば終盤の勉強に割く時間を節約できるんだから、序盤をみっちりやれるよね」

「なるほど……」

もう一つの対局はまだ続いていた。相変わらずつっこちゃんはクラシカルな駒組みで、こちらは序盤の研究以前の話だ。ただ、悪くなっているわけではない。知識はないが、序盤力はあるのだ。仲間からはぐれて飛んでいた渡り鳥が、結局同じ日数で目的地に着くような感じだろうか。中盤も互角で、センスの光る手を放って優位になった。そして終盤は、相手の手を殺すことに専念していた。最善とは言えないが、実戦的な指し回しである。

そのままつっこちゃんが勝って、感想戦が始まった。研究会の肝はここである。対局は、自分の弱点を明確にし、そこを克服していくための材料に過ぎない。そしてできれば、三人にも俺の弱点を見つけ出すほどの頑張りを期待したい。

次は俺とせっきー、つっこちゃんとファミリアで対戦。せっきーは居飛車党で、横歩取りの激しい将棋になった。落ち着いて指しているが、体格のわりに迫力が感じられない、とも言える。せっかくなので温めていた新手を指してみた。とたんにせっきーの動きがせわしなくなる。慌てていることが手に取るように分かった。山場もなく押し切った。これでは新手が有効だったのかどうかはよくわからない。

つっこちゃんは苦戦していた。ゴキゲン中飛車に対するこれといった対策がないのかもしれない。それほど謎の駒組みだった。ただ終盤、銀を見捨てて端攻めに打って出たのは鋭かった。結果にはつながらなかったが、可能性は感じられた。

最後は俺とつっこちゃん、ファミリアとせっきー。こちらの対局は角換わり。つっこちゃんは5筋の歩を突いて、銀を出てきた。昭和の指し方である。なんというか、基本的につっこちゃんの将棋は古き良き時代を感じさせる。

正直なところ、自分でも形勢判断がしにくい局面が続いた。つっこちゃんは時折小さな息を吐いて、盤面をぐるりと見渡した。この子はひょっとして、将棋のルールだけを頼りに指しているのではないか、そういう思いすら抱いてしまう。たった20秒で、全てのことを読み取ろうとするかのように盤面を深く見ている。俺は、その姿を目に焼き付けたかった。

だが、つっこちゃんの弱点ははっきりしている。終盤も、知識が重要なのだ。たくさん指して、並べて、見ているうちにある程度の筋は覚えてしまう。つっこちゃんにはその点が圧倒的に足りない。

寄せ始めると、あっという間に寄ってしまった。隣の対局はすでに終わっていたようで、二人で中盤の検討をしていた。

「最後、ちょっとよれちゃったね」

「……そう……ですね」

対局が終わると、つっこちゃんの表情は暗くなった。まるで、共通の言語をなくしてしまったかのように、俺の言葉に小さな声で同意するばかりだった。

「でも、これからどんどん強くなるよ」

「……頑張ります……」

彼女は、この世界に突然飛び込んできた。俺らが子供の頃から培ってきた対話方法を、ほとんど知らないようだった。将棋は、将棋以外の世界を引き寄せてくれる。こんな俺でも、何となく礼儀作法が身についている、と思う。それはプロの世界だからとかではなくて、将棋をする中でいろいろと学べてきたことだ。

「何か……こう、思うところがあったら言った方がいいよ」

「え……その……」

「ん？」

「時間って……どう使えば相手が慌ててくれるんでしょうか？」

意外過ぎる質問に、ファミリアやせっきーまで目を丸くしていた、まあただ、こういうところがかわいいじゃない、って俺は思うのである。

研究会が終わると、三人の後輩たちが頭を下げて、「またお願いします」と言った。悪い気は全くしない。

「よし、わかった」

もちろん、つっこちゃんがいるならやる気も倍増だ。ただ、自分のために思えばこれはベストじゃない。次こそ……次こそ川崎さんに勝つためには、もっと厳しいことをしなければだめなのだ。

とりあえず会館に残り、将棋の勉強を続けることにした。

最近、家に本当にいろいろともものが増えた。洋服が増えたらそれに合う小物が欲しくなるし、小物が増えたらインテリアにも凝りたくなる。音楽もいいスピーカーで聴きたくなり、買うCDも増えた。このままいくと赤字になってしまうのではないかと思うほどだ。

将棋だけの人生は、長くは続かないと思う。将棋のためにも、家ではいろんなことをしていいのかな、と思うようになった。恋をして結婚して、家庭を持つこともあるかもしれない。ちょっと人とは違うルートだけど、棋士だって普通のことをたくさんしていいはずだ。

ただ、普通の棋士にはなりたくない。それを許容してしまったとたんに、俺はだめな棋士になっていくだろう。一番を目指すことで、なんとか十番になれる、そういう人間だってことは自覚してる。

ブルームスの流れる部屋で、アイロンをかける。新しくした夏用のカーテンが、太陽光を何割か部屋の中に透過させる。そんな日常の先に、大事な勝負はいくつか迫っている。

そう、日曜日のテレビに、初めて出るのだ。びしっとした格好で決めなければならない。

ネクタイを並べてみる。どれがいいだろうか。選ぶのに、一晩じっくりかけてもいいぐらいだ

。

「しゅうさんとなら、VSしてもいいですよ...？」

途中編入した大学で、まだそれほど馴染んでいなかった時期の学園祭。

同じ専攻の学生で将棋バーの模擬店を出すことになったので、僕もお手伝いに参加した。

同期が一人、先輩後輩全員集めても10人ちょっとのマイナーな専攻なうえに、途中編入だから他専攻の学生と一緒に授業もほとんどなく、僕の存在はほとんど知られていなかった。

そんな僕がほぼずっとカウンターに立っていたので、見たことないけど新入生らしくないこの人は誰なんだろう？という視線にずっと晒されていた。

僕もこの学園祭をきっかけに知り合いを増やし、新しい学校に馴染みたいという思いもあって、顔見せも兼ねてお手伝いしてた。

先輩にすごく人付き合いのいい女子がいた事もあって、初日からバーにも女子が多く訪れていた。

数人で来てずっと研究をする人。

将棋はせず、お酒だけ飲んでる人。

色んな人が訪れて、まあまあ賑わっていた。

そんな中に一人、矢内女流をもっとほんわりさせたような雰囲気の子がいた。

彼女は数人で来ていたが、将棋はちょっと覗く程度で、やたら僕に話しかけてきた。

「編入なんですかー？うちの学校だと珍しいですよね。」

「棋力はどれくらいなんですか？」

「私？全然たいした事ないですよー。」

少しお酒が入ってる事もあってか、よく喋る子だった。

僕は、すぐに彼女の魅力に惹かれていた。

本人はたいした事ないと謙遜していたが、周りの人が話すのを聞いた感じでは、彼女もなかなかの棋力らしい。

特定のVS相手はいるんだろうか。
僕とVSしてくれたりしないだろうか。
そんな事ばかり考えていた。

学園祭の最終日の朝。
昨日と同じようにカウンターに立っていると、彼女が来た。

「おはようございまーす」
「あ、まだ準備中で、誰もいないですよ。」
「ほんとー？ちょうど良かった！」
何がちょうどいいのかすぐにはわからなかったが、彼女は昨日と同じようにカウンターに座り、色んな話をしてきた。

彼女はなぜこんなに僕に話しかけてくるんだろう。
恐らくこの状況で少しでも思い上がらない男はいないんじゃないだろうか。

「どうして、そんなに僕に話しかけてくれるの？」
筋の悪い攻めだけど、直接歩をぶつけてみた。
自分の勝手読みでは、指定局面に持ち込めるはず。

「えっ...どうして？嫌だった？」
同歩。
「そんな事ないよ！君に話しかけられて嬉しくない男はいないよ。」
同銀。

「私だって、誰にでも話しかけるわけじゃないんだよ...！」
同銀。
「じゃあ、どうして？」

同角。これが王手。
「どうしてって.....」
フラフラと玉がよろけた。
「今日、学園祭の後ってどうするの？」
視点を変える。B面攻撃だ。

「えっ...私はサークルとか入ってないから何もないけど...」
これはもう受けが効かない形になった。
「僕は片付けがあるんだけど、その後僕の家で飲みなおさない？」
王手。
「えっ...？」

ここで相手の表情を見る。

嫌悪感があったり、冗談っぽく受け取っていたら
すぐに手を変えなきゃいけない。

戸惑ったような表情をしていたら、踏み込まずに一度手を戻す。

「あ、でも特定のVS相手とかいるんだよね。そりゃダメかー」

手を戻されると相手もついつい本音が出る。

「えっそんな人いないですよー！」

「じゃあ、僕じゃダメかな？」

返す刀で斬り込む。

「えっ？」

いつの間にか「Yes」か「No」の二択になっている。

それも、内容は「今日の夜飲み直す」ではなく「特定のVS相手になる」に変わっている。
これが僕の指定局面。

返事を急かさず、目を見て待つ。

しばらく待って彼女は口を開いた。

「しゅうさんとなら、VSしてもいいですよ...？」

次の朝、僕と彼女と一緒に学校に行く途中、
電車の中でばったり僕の専攻の先生に見つかった。

「おや・・・？ほー、なるほどねー。」

先生のニヤニヤした視線はちょっと嫌だったが、

それ以上に、僕は彼女のVS相手になれたことが嬉しかった。

ただ、先生に見つかったこともあって、狭い学校内にすぐに噂は広まったようだ。

数日もすれば、僕は「あの子のVS相手」という認識になった。

彼女と一緒にいる時でなくても僕に話しかけてくれる人が増えた事は、

学園祭までぼっちだったことを考えると、大きな変化だった。

話しかけてくれる人の中に一人、

「...あの子には、気をつけた方がいいよ...」

と、意味深な忠告をする子がいた。

彼女と同期で仲もいいはずなのに、どうしてそんな事言うんだらう？

その時は理解できなかった。

学園祭が終わって1ヶ月、もう少しでクリスマス。

彼女とはそれっきり不思議とVSはしなかった。

学校帰りに飲みに行ったり、家に遊びに来てくれたり、ただ一緒にいるだけで心地いいと思っていた。

彼女が資格試験のため、数日学校を休んでいた間、例の忠告女が僕に話しかけてきた。

「...ちょっと教えて欲しい局面があるんだけど...」

僕の得意戦法でもあったので、別にそれ自体は問題ない。

彼女へのクリスマスプレゼントを選ぶのを手伝ってもらうのを条件に引き受けた。

「...あの子のことなんだけど」

買い物の後、また忠告女が忠告してくれるらしい。

女子は仲良さそうに見えて、そうでもないことがあるから、怖い。

「...あの子と、VSしたの？」

なかなか直球だ。下世話だとも思ったが、真面目な雰囲気に向けて、変に濁すのはやめた。

「...まあ、一応。」

「しゅうさんは、本気なの？」

「それはもちろん。」

これは即答。

「あの子の方は？」

「...それはなんとも言えないけど、そうだと思いたいよね。」

なぜか自信が持てず、返事に一瞬詰まってしまった。

「...そう、じゃあ、私からはこれ以上いう事はないわね。」

忠告女は「そんなことだろうと思った」という表情をしていた。

こんな意味深な事を言われては気になって仕方がない。

あまりいい話ではない予感があったが、その子の知っている事を全部聞き出した。

彼女と忠告女は、高校時代からの友人だという事。

彼女には高校時代からの特定のVS相手がいる事。

その相手は今は地方の別の大学に通っていて、主にネットで研究会をしてるらしい事。

それ以外にも、彼女にはVS相手がいるらしい事。
その中の一人には、あの電車で見つかった先生も含まれている事。

忠告女の話が全部本当かはわからない。
けど、そうだとしたら色々と思い当たるフシもある。
本気だったのは、僕の方だけだった。
学園祭の日の指定局面、僕が誘導したと思っていたけど、実は彼女に誘導されてたんだ。
こちらは全力で、向こうは少なくとも4面指しの上手。
棋力が違いすぎる…。

彼女にとって、僕は祭りの日の花火。
ただのVSフレンドに過ぎなかったんだ。

その年のクリスマス。
僕が割り切ってしまうえば、ただのVSフレンドとして付き合うこともできたんだろうけど、その気にはなれなかった。

僕の部屋には渡せなかったプレゼントと、例の忠告女がいた。

第2回「振り返ることを知らない俺たちのための栄光（グロリア）」

どうも、半島です。

先日、編集長に「これって将棋とおむすびの関連性薄くない？」って言われて初めて気が付きました。

うん。やめて！半島のライフはもう0よ！善処します。

さて、それでは本題に入りましょう。

今回は予告通り「香車」っぽいおむすびを作ってみました。

した。

香車.....それは一本義で振り返ることを知らない駒.....

気が付いたら盤上の片隅に忘れ去られている駒.....



香車「あなたのハートにロックオンっ！」

一本義なら具は真ん中に一点集中だろ常識的に考えて！



そう思って今回は「梅干し」をご用意しました。
来たよ来たよ！おむすび最強装備！

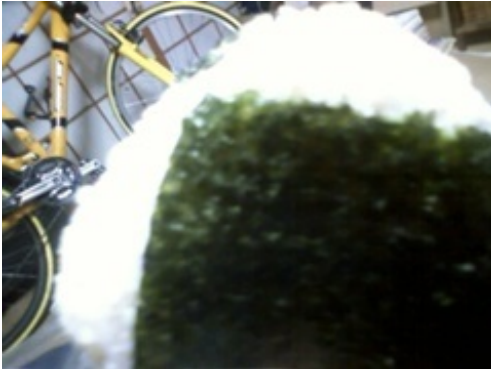
ペンギン「駒娘たちと皆川さんは正義！！」

握ります！

ラップに塩を振り、玄米ご飯を敷き詰めます。
レンジで温めた玄米ご飯の真ん中にくぼみを作り、
梅干しをドーンとのせちゃいましょう。



それにしてもレンジ玄米.....便利な世の中になったもんだ。



どうよこれ!?

仕上げに海苔を巻き、香りを演出した所で完成。
どアップピンボケですが、部屋が汚いわけではないんだよ? ほ、ほんとうだよ! ? 隠してなんかいないよ! ?

今日は海に向かおうと思ってます。

車道を走る際は交通ルールを嫌って言うほど守りましょう。
時速20km程度でも、人にぶついたりしたら大惨事です。
手信号をしっかりと出しつつ走っていきます。



サイクリングロードへ向かっているのですが、今日に限ってあいにくの曇り。
路面にも水たまりがあっていやーな感じです。



住宅地を抜けて川ぞいへ。

前は川を上ってたんですが、今回は下り。

サイクリングロードに入る前にちょっと寄り道でもしましょうかね。



サイクリングロード川ぞいの観音様、「花島観音」という名で親しまれているスポットです。

門には草履がいっぱいつるしてあって、なかには巨大草履もかざってあったりします。

旅の安全を守ってるお寺なのでしょう。

仏様と神社が混在してる場所なのですが、正しくは天福寺というそう。

御本尊は木造十一面観音立像。この像は、33年目ごとに開扉(かいひ)される秘仏なのだそうです。

神社は天津神社という名がついてますが、御祭神がどなたなのかははっきりしていません。



神社・寺好きのぼくとしては外せません！

しっかりとお祈りを.....

「三東先生の勝率が7割になりますように！」

.....実は三東先生のファンなのです。
せんせーはどうして勝てないのでしょうか。
作者の悪意を感じます。

皆川さんといい三東先生といい、月子さんに美味しい所ぜんぶ食われてやしないか！？

くっそおおおお！



サイクリングロードに入って川を下っていくと、田んぼやら原生林やらばかりの風景がつづいていきます。

ペンギン「俺たちは世間のしがらみなんかに縛られちゃあいけない。

なにもかも.....背を向けて逃げていくんだ」

そんな台詞が脳内に浮かんできては消えていきます。
俗に言う厨二病です。末期です。もう治りません。



川をまたぐ橋。その上を電車が走っていきます。
撮り鉄の方からしたら、ショボイことこの上ない写真.....。



海がそろそろ近くなってまいりました。
川ぞいにボートが停泊しています。
奥に見えるビルは幕張のビルです。



っていうか、まだかよ.....海ッ.....

ここまでくるのに大体10km.....。
体力がないせいか、いい加減ばて気味になってます。
頭がふらふらしてきた.....。
海は.....海はまだか.....！



こ、このトンネルを抜ければ.....



「海だあああああああああ！！！！」

思わず心の中でガッポーズ。

一気に疲れが吹き飛んでいきます！

あああ、やっとついたああ……。ああ一晴れだったらもっと絵になったのに……。残念です。

今回の海は千葉の西側、幕張にある稲毛の人工海岸です。

カーブしている出っ張りには釣り人がいつもいます。

夏にはイワシ、冬にはイカがとれる釣りスポットです。



では……。いただきますか。

香車おむすび、実食……。！！！！



じゅううううしいiiiiiiiiiiii！！

汗を大量にかいたせいか、梅干しの酸味と塩っけがこの上なくうまい！！

なにこれ、この世の食べ物なの！？

トロトロの梅干しがじわあ〜っと口の中にとろけていきます。

まさにまっすぐな味。

いいですね～～。

乾坤一擲な感じがします。

うーむ、まっすぐ直情……情念？

こういうおむすびには短歌界の名物夫婦が似合いますね。

われ男(を)の子意気の子名の子つるぎの子詩の子恋の子あゝもだえの子（与謝野鉄幹）

旦那のほうの有名な歌はこれ。

意気軒昂な剣をもって詩や恋を切る！

益荒男ぶりの短歌といえましょう。次は嫁の短歌です。

ああ皐月(さつき)仏蘭西(フランス)の野は火の色す君も雛罌粟(コクリコ)われも雛罌粟（与謝野晶子）

嫁の有名な歌はこれ。

フランスは五月に真っ赤に燃え上がる。

コクリコの花、男女の華、トリコロールの赤、そして熱き血潮の赤。

とんでもないくらいの激情と慕情。

決して手弱女ではない女の歌です。

さらに嫁はこんな歌も読んでます。

冬の夜の星君なりき一つをば云ふにはあらずことごとく皆（与謝野晶子）

旦那が死んだあとに詠んだ歌なのですが、「夜空のひかりはすべて鉄幹！！

」と詠みあげるなんて男らしすぎる歌です。

でも、まさしく半身だったのでしょう。

悲痛さがぴしりぴしりと伝わってきます。

情念の塊、まさに一本義な小梅ちゃん。

芸術家夫婦はひとくせもふたくせもありますねー。

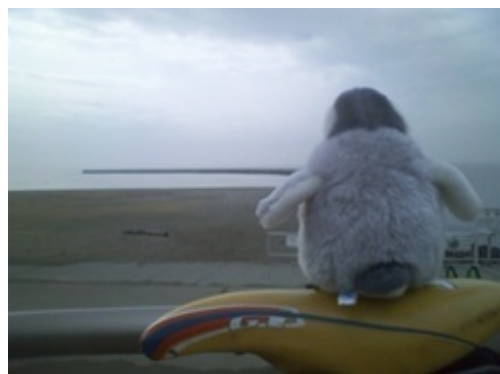
今回はただひたすらに漕いで行きました。
だいたい辿りつくまでに13kmくらい。
さすがにへとへとです。

でもご存知ですか？

行きがあれば帰りもあるのです……。

（総走行距離はだいたい27kmくらいでした……！

ヘタレだけど、いやー疲れた！）



では一首。

直線の夏、隆々と肩いかる雲、正眼の抜き身たる俺（半島）

句またがりという手法です。音数はそろえて、調子はずす技法。

この日本で最もまっすぐな季節に、最もまっすぐな気概を持ってみたいものです。

詠み方はひねくれてるけどな！！

詠み方だけはやっぱりまっすぐになれないか。シット！



さて幕張と言う事で、以前ご紹介したホットドッグ屋でライフ回復。

このお店には駒.zoneのチラシも置いていただいております。
幕張に来る機会があればこちらもどうぞ！

駒とおむすびとペンギン、次回も「房総暴走大妄想

～～☆ミ」の予定です。

うふふふっ……

次回予告



傍若無人に荒れ狂うペンギンの前に現れた謎の駒娘。

「あなたの好き勝手にはさせません、委員長の名に懸けて！！」

質実剛健な実直さを持つ攻めの要、銀！ 彼女はいったいどうやってペンギンの迷走を止めてくれるのか！？

銀でおむすびって何握ったらいいでしょ。

ギャグ路線？ ギャグ路線で行く？ もっと熱くなれよおおおおおお！！

！

文責 半島

イラスト 若葉

Love and hate (inspired by Osamu Dazai's " Kakekomi uttstae ")

Love and hate (inspired by Osamu Dazai's " Kakekomi uttstae ")

shogitygoo

申し上げます。申し上げます。お奉行さま。あの人は、酷い。酷い。はい。厭な奴です。悪い人です。ああ。我慢ならない。生かして置けねえ。

はい、はい。落ち着いて申し上げます。私はあの人の将棋の弟子であり好敵手であり世話人です。いや、それは私がそう思っただけ。あの人はそんな風には思っちゃいねえ。そもそも私なんか眼中にないんだ。あの世間知らずは私が世話しなきゃ今まで何もできやしなかったのに。それなのに、それなのに・・・。

はい、すみません。ちゃんとお話します。あの人はご存知のように将棋の家元です。このお江戸の町でも知らないものはいない。将棋の強さだけでなく、あの澄み切った姿に町娘たちはキャーキャー騒いでおります。私はあの人のところで将棋を指しながら働いているので、お上から禄をいただいているあの人同様、お上に仕える身です。

私はもともと富裕な商家の長男でした。若い時には道楽もいたしました。あの人の噂はお城将棋を伝えるかわら版で知ってしましたが、こちらはその頃は女遊びに忙しくて一へっ、すみません一将棋のことなんか何の興味もありやしなかった。

ところがある時、あの人がお江戸の町で将棋を指しているのを見かけてしまったんです。ええ、いまましい。あの人は、のんびり暮らせるいい身分なのに、庶民のためにわざわざ町にでてきて将棋をみんなにみせたりしていたのです。あの人の口癖はこうです。

一自分たちは米をつくるわけでも商売するわけでもない。何も世の中のためになることもしていないで将棋を指したり詰将棋をつくることに一日中明け暮れている。だから、せめてお城将棋以外にも、町に出て人々を楽しませるくらいのことにはしないとイケない。

けっ、立派なセリフでさ。でもね、あの人が言うと本当に心の底からそう思っているんだ。それが誰にも分かるんだ。将棋の家元なのに、自惚れたりえらぶっていることなんかこれっぽっちもない。あんな純粋な人はいません。あんな美しい人はいません。

私は野次馬根性で女を連れてあの人の将棋を見に行ってしまった。それが運の尽きさ。あの人の将棋を指す姿と言ったら・・・。あの人の周りの空気だけが澄み切ってこの世のものじゃない涼しげな風が爽やかに流れている。そして手を指す時には、その静かな空気が突然切り裂かれて閃光が走る。パチッという駒音と共に。

私の連れの女も、もう私のことなんかすっかり忘れて見ている。町娘たちもウツトリして見入っている。でも、その場にいた人間の中で一番あの人に惚れこんでしまったのは、他でもないこの私でさ。一目惚れってやつです。いや、私に変な趣味はありませんぜ。そうじゃない。あの人の姿の神々しさにしてやられたんです。将棋って一体なんだ？

もうあの人のことが忘れられない。なんとかして、あの人ともう一度会いたい。私は必死に考

えました。私は当時道楽をし尽くして親父にもすっかりあきれ果てられていた。勘当寸前の身でさ。そこで私は思いついた。親父にわびを入れて道楽をすっかりやめると誓いました。おふくろは泣いて喜ぶし、親父もほっとしている。一生懸命商売に身をいれました。ただ、一つの目的のために。

そして、私の信頼もすっかり回復してから親父に切り出しました。商売も一生懸命やっているけれど、ちょっと何か趣味が欲しい。いやいや、もう女遊びにはこりごりです、もっと健全なものを。何でも将棋の家元が評判らしい。私ももう年だし将棋でも始めてみたい。でも、私もこうして大店の跡継ぎだ。町の将棋道場で指すんじゃかっこうがつかない、いっそ家元に習ってみたいのだがどうだろう。

親父もすっかり安心していたので、それならいいだろうということで許してくれた。はい、私の家は金なら腐るほどあります。家元を呼ぶお金くらいどうってことはない。親父が知らなかったのは、私は商売なんて本当はどうでもよくても、なんとかあの人と会いたくてその為だけに必死に働いていたことさ。

あの方が家に来ました。年は私とほとんど変わらない。当時私はまだ大人になりたてで、あの人はまだ若造でさ。でも、一体なんなんだろう。あの方のこの俗生とは縁のない姿は。私はあの人に最初から将棋を教わりました。でも、最初は将棋どころじゃない。盤をはさんで座る、あの方の澄みきった目と、細い美しい指先。いや何度もいいますが私に変な趣味はありません。そうじゃないんです。よく分かりませんが神様や仏様に出会ったら、こういう感じになるんじゃないでしょうか。

しかも、将棋を指す前はニコニコしていたのに、指し始めたら雰囲気がガラッ変わるんです。初心者の私が相手の駒落ちですよ。ヘラヘラ笑って指しても平気なはずさ。ところが、あの方は厳粛な人を寄せつけない様子で盤面を見つめている。あれは多分私なんか見ちゃいけないんだ。何か将棋の神様みたいなもの相手に、駒落ちの将棋でも何かを見出そうと真剣に瞑想していたんだ。今にして思うとそうなんじゃないかと感じます。

最初はあの人に対する興味だけでした。でも、あの方が私みたいなへボにも真剣に真摯に教えてくれるんで、私にも将棋の面白さが段々分かってきた。私の方も、あの人と会う楽しさより、どうやってあの人に駒落ちで勝つかだけを必死に考えるようになっていった。将棋は本当に素晴らしいです。奥が深い。いくら学んでも新たな発見がある。

私はあの方が驚くくらい速く上達した。もともと算盤とか得意で、これでも子供の頃は神童といわれていたんでさ。それに女で実証済みの凝り性が加わるんだら間違いない。自分で言うのもなんですが。あの方が、素直に純真に驚くのが見たくて必死に勉強しましたよ。角落ちまでいった。このお江戸でもあの人と角落ちで指せる人間はそんなにいないはずでさ。

そして私が強くなるにつれて段々分かってきた。全ての駒落ちの棋譜を書き残していたんですが、それを見直すと、あの方が下手にはわからないように、微妙に手抜きして局面の絶妙の均衡をとり続けていたことが。下手にもきつい局面だが、上手も常に挽回ギリギリの線を保ち続けている。あれは本当の芸術だ。あの方は駒落ち将棋でも、自分の限界のギリギリまで挑戦していました。そういう人です。

しかし、角落ちともなると上手にもそんな余裕はない。もし手抜きしたら下手も分かってしまう。だから駒落ちでも真剣勝負です。

そして私は突然全く勝てなくなった。それまでも盤の前に座るとあの人は全く別人だった。でも、本気になると本当に将棋にあの人が完全に占拠されてしまう。いや、そんな生易しいものじゃない。あの人がそのまま将棋になっている。私のほうを見たり、身体を揺すったり動きがすごく激しいが、あの人は多分自分ではそんなことを全く意識していない。深い海にもぐってしまっている、あの人の肉体はなく、将棋の意識だけが純粹にうごめきまわっている。

それは実際にあの人と盤をはさんでみないと決して分からないでしょう。とににかく恐ろしい体験です。私は将棋以前にあの人の得体の知れない存在に圧倒されていた。でも、あまりに負けすぎるので、私もそんなことを意識せずに段々将棋のことだけ考えることが出来るようになりました。

もう何連敗した後のことかは分かりません。私は、ついに目の前のあの人のことを完全に忘れた。私はどこか深いひんやりとした静かな海の底を歩いていた。もう何も意識していない。私という存在はなく海もない、ただそこに絶対的な実在感のある何かがある、それを意識している自分もない・・・。

あの人の「負けました」という言葉で、私はハッと我に帰った。目の前には自分が指したとは思えない素晴らしい棋譜がありました。あの人は素晴らしい笑顔で「いい将棋でした。」と言った。不覚にも涙が流れました。私はその後ずっと将棋を指し続けてきたわけですが、後にも先にもあんな体験をしたことはあれっきりです。もしかすると、あの人はこんな体験を毎局しているのかもしれない。・・・そう思うと私は背筋がゾッとしました。

はい、申しわけありません。わけのわからない思い出話をして。私はこんなムダ話をしにきたんじゃないんだ。いまいましい。

私はもう将棋のことしか考えられなくなった。あの人に弟子入りして将棋を指して暮らしていくことに決めました。親父は激怒しておふくろは泣きました。自分で言うのもなんですが、私は商売の才能もある。もしかしたら親父より上かもしれない。でも、もうそんなことはどうでもいい。将棋の与える深い体験に比べると、金儲けも女もどんな快樂もうわつつらで薄っぺらくしか感じられない。私は結局ほぼ強引にあの人の住まいに住みこんだ。

しかし、それからがまた地獄だった。あの人の家には将棋指しがたくさん住んでいた。全員、あの人と比べればクズみたいなもの。しかも全員世間ずれしたお公家みたいな役立たずばかりさ。ところが、そいつらの将棋の強さと言ったら・・・。

全員、ガキの頃から将棋をたたきこまれている。身体で覚えた将棋でさ。最初は私なんか全く誰にも歯が立たなかった。それでも、私も必死に勉強した。特に序盤については、昔の棋譜の記録をあの人の書庫で調べて、徹底的に調べぬいた。昔の棋譜は役にたたないのも多いけれど、それを私なりに新しく編成して使えるようにした。

そんなことをしているのは私だけだった。どいつも序盤研究なんかバカにしている。将棋は、最後は力のあるものが勝つと信じ込んでいる。実際、私は研究を生かして序中盤では有利に出来るようになった。でも、どうしても最後は力で逆転されてねじふせられてしまう。私みたいに歳

をとってから頭で覚えた将棋の弱点でさあ。私の序盤研究なんか、奴らにはもの笑いの種。

でも、あの人だけは違った。皆がバカにする私の序盤戦術を実に楽しそうにニコニコして眺めていた。そして、弟子では一番位の低い私に色々質問までしてくださった。本当に少年が何にでも興味をもって尋ねるように。

私は私で、他の連中の腕力にも段々体で慣れてきた。ポコポコにされながら。私の序盤研究も本格的に完成して、奴らでも逆転できないくらいの差をつけることが可能になった。相変わらず終盤間違えて星をこぼすことはあったが、どんどん勝つようになった。そして、ついに弟子連中の中ではトップにまで上りつめたんです。

ご存知のように、お城将棋で家元と誰かが対局することになっています。他の家元と指すことも多いが、うちの中の弟子の誰かが選ばれてあの人を相手をすることもある。他の家元ではそんなことはありません。それくらいうちは、あの人以外も圧倒的に強かったのです。他では家元も出来る人間は多分たくさんいたでしょう。でも、どの人間もあの人をそばにいて将棋を指したい一念で、あの人を離れようとしなかった。どうしようもない連中だったが、そういうところだけはいじらしかった。

ところが、ある時私がお城将棋のあの人を対戦相手に選ばれたのです。今度は私でいきましょようと、あの人から静かに言った時の弟子の反応と言ったら。なんであんな力の弱いやつがという不満が部屋に充満した。特に高弟達の弟子たちの反応はひどかった。ある気の強い弟子がついに口に出してあの人に聞いた。なんで、私を選ぶのか、確かに最近よく勝ってはいるが、彼では私たちにふさわしい力のねじりあいなど望めないではないかと。

あの方は相変わらず静かに笑って言った。

一彼は確かにまだ終盤には弱点があります。でも、彼の開発した序盤作戦の素晴らしさがあなたたちには分からないのですか。彼は独力で将棋の未来の形を切り開こうとしています。なぜ、あなた方はそれを認めず、いつまでも旧態依然の将棋を指し続けているのですか？

口調は静かですが、あの人特有の誰も抗することの出来ない迫力がありました。弟子たちは、ハッとして静まり返りました。私は嬉しかった。いや、他の弟子たちの鼻をあかしたからじゃない。あの人から私の序盤をそんな風に評価してくれていたことをはじめて知ったからです。

そのお城将棋のことは、当時かなり話題になったのでご存知かもしれません。私が玉の囲いを後回しにする画期的な作戦を、あの人にも隠して初めて採用して圧倒的な有利を築き上げました。しかし、あの人にもさすがに決め手を与えてくれず、終盤はぎりぎりの大激戦になった。そして、最後は詰める逃れの詰めるの応酬が続いたが、私が最後の決め手を逃してあの人の方が勝った。終盤の苦手な私にしては奇跡的にすごい力を出せた将棋です。

私は負けたことよりも、いい将棋を指せた満足感でいっぱいだった。私を認めてなかった弟子たちも、ついに私のことを素直に認めてくれた。まるっきり子供の様な連中ですが、その辺は恐ろしく素直なのです。私は事実上、あの人を一番弟子として内外に認められるようになった。また、私はもともと商人で世事も得意だったので、世間知らずの弟子連中にかわってそういった問題も一手に切り盛りして、あの人を家元としての名声を高めることにも貢献したのです。

私は幸せでした。それ以上ないくらいに。しかし幸せというものは長くは続かないものです。

さっきも言いましたが、あの人は庶民を将棋で楽しませるのを義務のように考えていた。それが、お江戸の町中で将棋を指してみせるくらいならまだよかった。ある時、あの人は江戸の町を出て、郊外の農家村を訪れたのです。あの人はそれまで江戸の町を出たことすらなかった。そして農村の様子を見て呆然としてしまったのです。

ご存知のように、農村のあの貧しさはひどいものです。いえっ、皆さんお上を批判しているんじゃない。百姓は必死に働くしかない、それが当たり前だ。どってことない世の中の姿だ。ところが、あの人にはそれが納得できなかつたらしい。

農民は武士の次の位の身分なのに、なんでこんな苦しい貧しい暮らしをしているのだろう。なんで、こんな重い年貢に苦しめられているのだろう。私たちの食べ物をつくってくれているのに、報われずに働き続けなければいけないのだろう。

へっ、すみません。私が言っているんじゃない。あの人がそんな子供みたいなことを本気で考えたんだ。でも、私みたいに世の中の醜さも全て知っている私でも、あの人が心の底からそう言っているのを聞くと、黙らずにはいられませんでした。

それから、あの人の農村通いが始まりました。最初は農家の連中も迷惑がっていました。何の役にもたない将棋指しが、ただ話をきかせてくれとって村の中を歩き回るのでから。でもね、百姓連中もあつという間にあの人のあの澄み切った純粋な人柄にどんどん惹かれていきました。そして、当惑しながらも自分たちの暮らしの苦しさを正直に語り始めるようになったのです。

いや、私も少しは世間のことを知っているつもりでした。しかし、あの百姓どもの暮らしのひどさは想像をこえていた。私みたいなスレッカラシでも話を聞いていて胸が痛くなった。まして、あの人みたいな温室育ちがどう思ったのかは、想像に難くない。でも、あの人は決してメソメソしたり感情的になつたりしないで、百姓どもの話に静かに耳を傾けていました。不思議なことにあの人にただ話をきいてもらうだけで、連中も心が晴れたようです。

それから、あの人が計画を実行にうつすのは早かった。大してお上から禄をもらっているわけでもないのに、一へへっ、すみませんーそのお金をほとんどつぎこんで農村の援助をはじめたのです。田んぼの灌漑から何から。勿論、世間知らずの他の弟子どもは何の役にもたちやしない。私が一手に実務をひきうけました。いや、正直言ってあの人も何の役にもたなかつた。でも、私はあの人の気持持ちが本気なことだけはよく分かっていたので、喜んでやっていた。

でも、お金なんていくらあっても足りはしません。あの人の私に対する要求は、限りありません。私は、ついに自分の家の財産まで持ち出すようになりました。お涙頂戴物語はしませんが、親父には秘密で年老いたおふくろに久しぶりに会って全てを打ち明けたのです。おふくろは私がそんなことをしているのに本当に驚いていましたが、黙って私に金を渡してくれました。

私は倒れそうになるくらい必死に働きましたが、結果的に百姓どもの暮らしも、ほんの少しだけは安定して苦しくなくなったようです。あの人が百姓どもにどれだけ神のように感謝されたかは言いますまい。

そして、少し余裕が出来たので、あの人は百姓たちに将棋も教えはじめました。私はやめろと何度も止めました。百姓どもに将棋なんかできるわけがないと。しかし、あの人は頑として聞き

入れなかった。どんな人間にも将棋は楽しめるはずだと言い張って聞かなかったのです。

そして、あの人がやはり正しかった。私が思うより、はるかに将棋がよく上達した。我々町民は、自分たちの頭に自惚れているが、多分そんなのは自惚れです。将棋をやらせてみると、ただ田んぼほ耕しているだけの人間に恐ろしく素質のあるのがいる。私も面白くなってきて一生懸命連中に将棋を教えた。いや、あの人も正直言ってビックリしていたようです。

特に田歩の才能は抜きん出ていました。田歩というのはも百姓の将棋指しということで私がつけたあだ名です。こいつは、まだ若いんですが大酒のみの女好きでしょうもない奴です。村でもちょっともてあまし気味だったようです。ところが、将棋を指させると恐ろしく筋がいい。やつも、将棋にすっかりはまって酒もバクチも女もすっかりやめて、田んぼも真面目に耕すようになりました。村の連中も驚きながら大喜び。私は、なんだか昔の自分を見るようで、息子みたいに田歩にみっちり将棋を仕込んだのです。

そうしたら、どんどん強くなってなんと私でも平手で負かされるくらいに上達しました。私は人の将棋を見る目が誰よりもある。私は天才ではなく努力でここまできた人間なので、人の将棋を客観的に深く理解する能力があるのです。田歩の将棋には、なにやら荒々しい誰にも止めることのできない生命力がありました。我々の将棋にあるきどりのようなものが一切なくて、一直線に相手玉に向かっていく合理的な知恵が本能的に備わっているのです。

それは、あの人の他の弟子たちの誰にも見られない特徴でした。私が教え込んだ新しい序盤も、田歩にかかると余計な部分が一切そがれて鋭利な武器に変わりました。感覚自体が全く新しかったのです。それを私以外に理解しているのはただ一人でした。あの人です。

そしてついに、あの人と田歩が戦う日が来ました。残念ながらお城将棋ではありません。

仕事を終えた農家の夕暮れ、田園風景は美しく暗闇が広がる中、焚き木が焼かれて赤い炎が舞う中、農村の酒盛りが始まりました。その真ん中に将棋の盤がすえられて、あの人と田歩が盤をはさんで対峙している。

あの人は、農村に来る時はもう綺麗な着物など着るのはやめてボロに身をつつんでいる。田歩も負けずにきたない格好だ。しかし、私だけがこの勝負の本当の意味を理解していました。

百姓たちの歌い声がやかましい中、二人はそんなことに関係なくどんどん将棋に集中していく。

私が見たのは文字通り神局でした。あの人がいつも通りに堂々と相手の作戦を正面から受け止めていく。並みの指し手なら、その気合に萎縮して何も出来なくなってしまふ。しかし、田歩は恐れを知らない。私の教えた作戦を合理的に修正した鋭利な武器で、あの人ののど元をいきなりおどかす。あの人に対してそんな指し方をした人間はいままで一人もいなかった。

しかし、あの人も全く動じない。その突きつけられた鋭い刃物をぎりぎりに際どくかわすと、同じくらい鋭いきさきを田歩に返す。田歩も恐れず反撃する。私はそんな序盤を見たことがなかった。最初からいきなり殺しあいなのだ。作法も何も無い。しかしその緊張感のある美しさは筆舌に尽くしがたい。

そして、序盤からそのまま中盤終盤へと流れ込む。しかし、どちらも簡単に相手の技に簡単には倒れない。それどころか局面が混沌として、すぐにでも終りそうな局面がいつ果てるともない

局面に逆戻りする。全く羅針盤がきかない状態だ。しかし、二人は練達の水夫が勘だけを頼りに進路を見つけ出すように、やすやすと最善手を見つけだしてくる。

終盤は、もちろんどっちが一手勝っているかわからない。意表をつくタイミングで、攻め、受け。あるいは攻防手を放って終りそうな将棋がいつまでも終らない。もはや盤面には二人の存在もない。ただ、指し手が生きもののように勝手に生きてゆく。並みの指し手ならすぐ殺してしまいそうな生き物を、二人がずっと生きさせ続ける。いや、その得たいの知れない生き物に二人が導かれている。

最後は、田歩が下駄をあずけて必至をかけた。田歩玉は広すぎて詰むかどうか全く判断できない。しかし、あの人の持ち駒も豊富だ。私も必死に読むが全く読みきれない・・・。

田歩が搾り出すように言う。「負けました。」

奇跡的に田歩玉は詰んだのだ。あの人も田歩も魂を抜き取られたようにグッタリしている。百姓どもがワッと歓声をあげる。あの人がふっと我に帰った。

私が見たのはそういう将棋である。私は興奮しきっていた。しかし、同時に打ちひしがれていた。絶対に私には、こんな将棋は指せない。この将棋の真価を理解できるのは、この世の中で多分私だけである。しかし、私には理解する能力だけ持っていて、この二人の天才は一切与えられていない。なにんという残酷な快楽。私の全存在が最高の形で否定された。

田歩は打ちひしがれている。こうして感情を素直に表現するのも奴の新しさだ。そして、あの人も私は将棋を追いながら、あの人の対局中の様子も寸分も見逃さなかつたつもりである。あの人の対局姿は常に並外れているが、今回は明らかにそのどれとも違っていた。私にだけにはそれが分かる。私にも他の弟子にもどんな対戦相手にも見せた事のない、幸福感が対局姿から滲み出していた。指し手に苦悶しながら。

あの人もだいが我に返っていつものように静かな様子を取り戻している。そして私の方をみやると、珍しく軽口をたたくように言った。

一あなたも、これくらいの将棋が指せばなあ。

そして、今度は田歩の方を見るとこう言った。

一こんな才能が重い年貢でつぶされていくとは。町では皆がのうのうと生きているのに。

私は、その直前まで二人を祝福するつもりだった。しかし、私の中で何かが爆発して壊れた。

あの人は何を言っているのだ。私におまえら二人のような将棋が指したくても指せないのは分かっているだろう。誰よりもそれをあの人は理解しているのに。何を言っているんだ。

年貢だと。どれだけ、私がお金集めに腐心して苦勞して働きづめだったのを分かっているのか。

町の間人はのうのうと生きているだと。田歩みたいな宝が苦しんで、私みたいな才能のない人間が生き続けているだと。

もう一人の私が囁き続けている。

違う。あの人はそんな意味で言っているんじゃない。単に疲れて珍しく本音めいたもみのが漏れただけだ。邪心など一切ない。お前が勝手に自分で自分に怒っているだけだ。

しかし、もう一人の自分が私を圧倒して支配していた。自分の致命的な才能のなさの自覚と、

本物の天才二人を目撃したどうしようもない嫉妬。いや、そんな理窟じゃない。あの人の絶対的な美しさと純粋さに対する理由のない深い憎しみだけが私にあった。それをもうどうすることも出来ない。

お奉行さま、余計なことばかりいいましたが、要するにこういうことです。あの人はお上から禄をいただく身分でありながら、お上に逆らって農民をたきつけているとんでもないやつだ。今すぐひっとらえてください。世のためにならない。あんな美しい人間が世の中に存在していたら気が狂う。いや、何をおれは言っているんだ。

ああ、小鳥の声がうるさい。夜通し、ここまで歩いてくる途中でも鳥がうるさかった。耳についてうるさい。何を騒いでいるのでしょうか。鳩森神社でもピーチクパーチク。ああうるさい。

なんですか、褒美の金？ふざけるな！ひっこめろ！誰が金のためなんかにあんな神様みたいな人を売ったりする？！

いやいや、申しわけありません。いただきます。私も元は商人のはしくれ。おおせの通り金のためにあの人を売りとばしたのだ。間違いありませぬ。へっへっへっ。

(注)冒頭とラストで太宰治の「駈込み訴え」の一部を引用、または一部変更して使用しています。

対コンピュータ二手目6二玉戦法

対コンピュータ二手目6二玉戦法

ikkn

すでに記憶が薄れつつありますが、2012年1月14日(土)、米長邦雄永世棋聖が将棋ソフトのボンクラーズに破れました。将棋の内容として話題になったのは、やはり2手目の△6二玉でした。この△6二玉を含めて米長先生の玉の動きについて、思うところを書いてみようと思います。純粋に将棋の指し手としてどう思うか、ということは書きません。すでに勝負がついてしまっているのに中級の私でもなんとでも言えてしまうのです。ここでは、ソフトから見た△6二玉を想像したいと思います。

まず、米長先生の玉がどこにいたのかということ振り返ります。2手目に玉は6二へと上がり、58手目に7二へと寄ります。64手目に8三へと上がり、ここでボンクラーズの角が動き始めます。あとの顛末はご存知のとおりです。この6二、7二、8三というマスはソフトにとってどういう意味を持っているのか。

2006年にボナンザが登場してから、ボナンザを手本としてきたソフトがたくさん世に出てきました。ボンクラーズもその一つです。ですから、ボナンザのことを語りましょう。

ボナンザの局面評価というのは、「駒割」、「玉駒駒(kpp: king piece piece)」、「玉玉駒(kkp: king king piece)」がとても重要な役割を担っています。駒割というのは、歩が何点、金が何点、馬が何点とかそういうことを数値化した評価値です。人間でいえば駒得のことです。kppというのは見慣れないと思います。これは例えば、後手の玉が2二にいて、先手の桂馬が9八にいて、後手の銀が4四にいるときは何点だ、とかそういう評価値です。玉の位置と二枚のほかの駒の位置で点数が決まります。kppは全通りの値が用意されています。kkpというのは、双方の玉の位置と一枚のほかの駒の位置によって決まる点数です。これも全通りの値が用意されています。

この三つのほかにも評価項目はありますし、また、ボンクラーズはまたボナンザとは違った評価項目を持っているはずですが、おそらく似たようなものでしょう。とりあえず、△6二玉を語るにあたってはこの三つの局面評価方法が頭に入っていればよいです。

kppとkkpはちょっと考えただけで、膨大な要素数になるということが分かると思います。では、この点数をどうやって決めているのか。それが一時期話題になった「機械学習」という技術です。学術的には深い意味がありますが、将棋ソフトにおいては「局面評価の点数の自動決定」という意味になります。自動決定の方法はいろいろと考えられますが、米長先生と戦った時点での主流は人間の指し手を参考にするというものでした。人間の指し手を参考にするので、前例が少ない要素(例えば桂馬が9九にいるなど)は、点数が狂います。

米長先生の玉の位置は、前例が多いでしょうか少ないでしょうか。深く考えるまでもなく、少ないです。6二、7二の位置に玉があることはありますが、振り飛車が美濃や穴熊に囲う通過点であることがほとんどです。また、8三はすでに終盤で寄っていきそうな位置です。要するに、米長先生の玉の位置というのはソフトにとって非常に厄介なのです。

では、どのように厄介なのでしょう。もう少し細かく見ていきましょう。まず、双方の玉の位置を考えるkkp(玉玉駒)の点数は確実に狂います。そして、kpp(玉駒駒)のうち、後手玉の位置を計算する部分も狂います。まともに動くのは、「先手玉・駒・駒」の組み合わせのみです。そのほかに頼れる評価値は、位置に関係のない駒割(駒得)しかありません。先手玉の位置と駒割りだけでおそらくボンクラーズは戦っていました。

ここで、一枚の局面図を掲載します。先手玉の位置だけで戦っている局面です。これがボンクラーズから見たあの将棋です。ボンクラーズは何を目標に攻めればいいのか分かりません。厳しい戦いです。

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
▲	皇	科	爵	参		参	爵	科	皇	一
		飛						馬		二
	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩		三
										四
										五
			歩							六
	歩	歩		歩	歩	歩	歩	歩	歩	七
		角						飛		八
▼	香	桂	銀	金	玉	金	銀	桂	香	九

米長先生は、「大山対大山」の駆け引きだったと語っていらっしゃいましたが、少なくともボンクラーズは大山先生ではありませんでした。むしろ、駒得と白玉の堅さだけを目指す初心者だったのではないのでしょうか。

コンピュータを初心者にしてしまうこの△6二玉は、優秀だったと認めざるを得ません。そして、初心者の戦い方で勝ってしまうようなソフトを開発した人間も、優秀だったと認めざるを得ません。

ぼくの名前は「ぼふぼふ」。
変な名前だけど、ちゃんと漢字もあるんだ。「歩歩歩歩」
将棋の駒に「歩」ってあるよね？　そこから生まれたらしいんだ。
らしい？　というのは、ぼくは未来の世界で作られたアンドロイド。
あ、アンドロイドといっても、ケータイのことじゃないからね。ロボットのほう。
ぼくは未来の世界で作られて、現代に送り込まれたんだ。
たったひとつの目的のために……。

毎週日曜の午後、この小さな公民館で将棋道場が開催されている。
都会ならビルのフロアを使うかもしれないけれど、田舎はこういう建物が多いらしい。
階段を上って、廊下を進むと、駒音が聞こえてきた。元気がいいね。
ぼくは躊躇うことなく部屋の中に入ってみた。

そこは、おじさんとおじいさんの集まりだった。
あ、いや、よく見ると、小学生くらいの子も2人いるようだ。
ぼくはアンドロイドだけど、現代の世界では「こども」の姿をしている。
彼らはぼくを見ると、仲間が増えたことを喜んでいるかのように笑った。

道場の代表者らしきおじいさんが、ニコニコ顔で話しかけてきた。
ぼくはネットでこの道場を知り見学に来たのだと伝えた。
おじいさんはこどもが好きなのか、将棋指しが好きなのか、どちらにせよ、ぼくを歓迎してく
れた。
早速、いろんな人の対局を観察することにした。

さっき廊下で聞こえていた駒音はこのおじさんだったのか。
とにかく威勢がよくて、プラスチックの駒を二寸盤に叩き付けようとしている。
駒がかわいそうだよ、きっと。もちろん、盤も痛いだらうね。
このおじさんは、「空打ち（からうち）」といって、駒をテーブルの上に何度も叩き付けてリズム
を取っている。

さらに、持ち駒を重ねてみたり、手の中に隠したり、とにかく相手から見えないみたい。相手の人が困った顔をしているかと思いきや、澄ました顔をしている。どうやら、このおじさんの癖は、この道場では定跡になっているらしい。納得。でも、本当はこういう行動は駄目だよ。駒を隠すことも、何度も空打ちすることも、相手に失礼だからね。ちなみに、このおじさんは早指しが得意なようで、相手が指し終わらないうちに、手を伸ばす。これも明らかに迷惑行為だからね。

隣の席には、これまた面白いおじいさんがいたよ。将棋の内容は定跡を無視した独特の指し回しで、なんかすごいんだ。これを「力将棋」というんだけど、とにかく力戦形に持ち込んで、相手をねじ伏せる作戦。定跡から外れると、途端に目の前が真っ暗になってしまう人もいるからね。そういう将棋戦法は別に悪くないし、いつの時代も新しい手が生まれてくるもの。過去の定跡が日進月歩に塗り替えられることは珍しくないよね。ぼくが作られた未来の世界もそうなんだ。現代よりはるかに進化しているよ。でも、このおじいさん、よく喋るんだ。自分が指すとき、相手が指すとき、隣の将棋をみているとき、とにかく喋る。しかも、数手先のアレコレな内容だけに始末が悪い。相手の人はまたもや涼しい顔をしているけれど、内心はどうなんだろうね。このおじいさんもまたこの道場では有名な定跡なんだね。納得。対局中に独り言をつぶやくことはプロ・アマ問わずあるけれど、相手に話しかけるときは要注意。

これは「盤外戦術」といって、相手に心理的なダメージを与えるんだよね。検討しているときならまだしも、対局中に邪魔されると嫌だよ。

さらに隣の席は、ちょっと若いおじさんが「待った」を連発している。駒から手を離したら、もう後戻りはできないのが将棋のルールなんだよね、本来は。指した瞬間に、猛烈に後悔することもあるけれど、それもまた苦い思い出。もちろん、練習将棋で楽しく指しているときは、双方が納得していれば「待った」アリ。このおじさんは、指した直後に悪手に気がついたのかもしれないけれど、我慢、我慢。後悔するから、反省して、強くなるんだからね。

奥の席は、対局が終わったみたいで、検討をしている。これは「感想戦」といって、この手がどうか、あの手がどうか、検討するんだ。対局者の読み筋披露みたいなもの。外野の参戦もあり。和気あいあいで楽しいよ。どこが悪手だったのかを知ることが、強くなるための第一歩だからね。負けた側は自分の意見を言いづらくて、勝った側の言いなりになることもあるけれど、気にし

ない、気にしない。

大切なことは、自分の勝手読みを改めること。将棋はふたりで作るんだからね。

そうそう、さっき見かけた小学生らしき2人はどうだったかな。

パイプ椅子の高さが合わなくて、となりの畳部屋の押し入れから座布団を持ってきてたよ。

椅子の上に座布団。もう1人は椅子の上に正座。愉快的な光景だよね。

ちゃんと背筋を伸ばして、ピシッと指す姿は素晴らしい。

頬杖をついたり、隣の将棋をずっと見たり、という行儀の悪さはないようだ。

礼儀は大切だよ。勝ち負け以上にね。

この道場は月に一度は例会と称した大会を開いているらしい。

普段は気軽に対局しているけれど、例会は真剣そのもの。

優勝から3位までは賞品がもらえるんだけど、道場での段級位にも影響するんだ。

2回優勝すると1つ上の位にあがるとかね。

この道場に限らず、いろんな棋力の人が集まるから、強さはバラバラだよね。

初心者から師範代までかなりの幅があるから、道場に行ったら、まずは自分の棋力を知ることが大切。

そして、徐々にステップアップを目指すのがいいかな。

ところで、対局には「駒落ち」というハンデを付けてもらおうと、みんなが楽しめるよ。

同じ棋力なら「平手（ひらて）」といって、自分も相手も同じ駒数で対局することが普通だよ

。

でも、棋力に差があるときは、差に応じて上手（うわて）が自分の駒をなくしちゃうんだ。

たとえば、「二枚落ち」なら、飛車と角が盤から消えてしまう。

これだと、下手（したて）も勝てそうな気がするでしょ？ もちろん、そう簡単にはいかないけどね。

「駒落ち」の魅力は、単なるハンデ戦ではなくて、将棋の上達につながるってことなんだ。

上手も下手も勉強になるからね。

だから、将棋が弱いから道場は苦手……という人がいたら、ぜひ、駒落ちを楽しんで欲しいな。

この道場は、例会のときに、駒落ちと時間のハンデを付けているみたい。

強い人は駒を落とし、さらに、持ち時間も短いから、大変みたいだよ。

ぼくはこの公民館でまるまる午後を過ごした。

いろんな人がいるから、将棋を指すことよりも人間観察のほうが楽しかったよ。

未来の世界ではコンピュータ将棋なんて当たり前で、コンピュータのプロ棋士もいるんだ。

対局はコンピュータ同士とか、人間対コンピュータとかね。

コンピュータとの対局は画面上で行うことになるんだけど、人間同士も盤や駒を使わないよ。
ネット将棋のように、パソコンを利用して遠隔操作での対局になるんだ。
だから、画面だけを見ていると、誰が指しているのか分からないし、寂しいよね。
なんだか、勝負に徹する冷たい雰囲気があって、ちょっと物悲しさも覚えるんだ。
その点、現代の人間同士の対局は面白いよね。
いろんな戦法で、いろんなミスをして、いろんな感想をいって、いろんな駒にふれて、とにかく楽しむ。
強くなることも大切だけど、それ以上に将棋が楽しめるといいよね。
家でひとりでネット将棋もいいけれど、道場にちょっと顔を出してみるのもいいかも。
もちろん、地元の大会に参加することも面白いかも。
将棋は指せないけど、観るのは好きという人もね。

人とふれあうことで、将棋の魅力は増していくんだ。
ネットやコンピュータもいいけれど、相手の顔を見ながら指すのも楽しいよ。
道場や大会に参加すれば、顔馴染みもできるし、新しい人にも出会う。
プロ棋士のタイトル戦を追いかけて、旅するのも素敵。
そうやって、楽しみを共有できると嬉しいよね。

ぼくが未来からやってきた、たったひとつの目的は、将棋の普及なんだ。
それも、人と人との「ふれあう将棋」だよ。
そのためには、もっともっと将棋にふれる人を増やさないといけないよね。
ぼくはそんなお手伝いをしたいから、未来からやってきたんだ。
自分でいうのも何だけど、コンピュータより人間の方が楽しいよ、ホントに。

会場は異様な熱気に満ちていた。これまで経験したことのない、不思議な空間になっている。再会を喜ぶ女性たちの輪や、孫の自慢話をする老人たち。携帯ゲーム機で通信をしている子供たちまでいる。

第一回将棋混合団体戦ファルタ杯。今年初めて開催される、調理器具メーカーファルタ社主催の大会だ。その前夜祭で、ホテルの大会場には参加者や関係者など百人近い人間が集まっている。しかも普段の大会とは、随分と構成が違う。それもそのはず、この大会は一般・シニア・女性・高校生・中学生以下の五人で戦う「混合」の団体戦なのである。

僕は九州代表チームの一員としてここに来た。懐かしい顔もあり、和気あいあいとした雰囲気.....にはならない。おそらく会場で一番、せっぱつまっている。

「あの.....」

バイキングのローストビーフを取ろうとした時、突然声をかけられた。聞いたことのない、柔らかい女性の声だった。

「はい？」

「榎田さん.....ですよ？」

声の主は、白いワンピースに桜色のカーディガンを羽織った女性だった。顔立ちはスッと整っていて、唇の艶がとても色っぽい。美人だった。

「ええ、そうですけど.....」

「やっぱり。この前、『将棋宇宙』に載ってましたよね？ あの将棋、かっこよかったです」

「ああ、あれ.....。ありがとうございます」

彼女が言っているのは、先月の将棋雑誌に載った学生全国大会の記事のことだ。我が大学は初出場初優勝という快挙を狙ったものの、結局六勝三敗で四位という成績に終わった。ただ、僕はそれまで団体戦負けなし、実に38連勝を誇っていた強豪に初めて土を付けたことでちょっとした話題になったのである。こちらも将棋推薦で大学に入った身として、一発入れてやろうという気持ちは大きかった。そして何より、優勝によりもたらされる特典が気持ちを押し上げてくれた。

「すごいと思います。無敗の学生チャンピオンにああいう勝ち方」

「いや、たまたまです。大事なところでは負けてしまいましたし」

「でもまだ一年生なんですよ。トップ、狙えますよね？」

「ははは、だといいなあ」

僕は、彼女の首元を見ていた。女性と視線を合わせられないへたれということもあるが、何より彼女の鎖骨がとてもきれいだったのである。

「あ、明日九州チームとは対戦するみたいなので、その時もよろしくお願いしますね」

「え、どこのチームなんですか」

「海外招待です。一昨日、帰国したばかり」

思い切って顔を上げると、にっこりほほ笑んだ顔にうっすらとえくぼができていた。

「海外からですか！ 将棋はいつごろから？」

「結構小さい頃から。あ、そろそろ戻らないと。では、また明日」

「はい、また」

小走りで去っていく彼女の背中を、しばらくぼーっと眺めていた。清楚でかわいくて、話し方はしっかりしていて。僕がもし一目惚れしているとしても、何の不思議もないことだ。

席に戻り、先ほど貰った大会パンフレットを開く。海外招待チームの参加者を確認する。女性・麦野冬美。白いワンピースと、白い肌。名前と容姿が、すぐにリンクした。

浮かれている場合ではない。が、残念ながら僕はすぐに浮かれてしまう人間なのだった。

事の発端は……高校時代にまでさかのぼる。

まったく勉強していなかった僕は、「高校開校以来見たこともない成績」と教師に言われるほどの駄目っぷりで、とても合格できそうな公立大学が無い状態だった。そして親からは、公立以外お金は払えない、と言われていた。そんな中、一通の手紙が届いた。聞いたこともない名前の大学から、将棋による一芸推薦入学のお誘いだった。なんでも一年目は学費免除、二年目以降も「全国大会で優勝した場合学費を八割免除する」というものだった。計算したところ、一度でも全国優勝で八割免除を勝ち取れば公立に行くのとかかる金額は変わりがない。これしかないと思い、何とか親を説得して入学したのである。

僕以外にも三人、将棋推薦で入っていた。しかも高校時代全国大会でよく見た顔たちだ。制度が始まったばかりで推薦組は一年生のみだったが、四人の力は大きく、いきなり春の団体戦で地区優勝した。さらに個人戦でも同級生が代表になり、全国大会で優勝したのである。彼は大学からしっかりと「来年度授業料八割免除」を約束する書類を受け取った。

とはいえ、個人戦ではたった一人しか優勝できない。そして団体戦では、さすがに他大学の壁は厚かった。何せ四年分の推薦組がいる大学や、やたらと強豪ばかりが入る高偏差値の大学があるのだ。学生大会以外も適用対象ということで頑張ったが、県代表になるのも大変だった。そして今年度最後のチャンスが、このファルタ杯だったのである。

この大会で優勝するのとならないのでは、何十万円もの違いがある。本当に大事な大勝負なのだ。そして、大いにチャンスがあると思っている。僕は、混合団体戦という形式は波乱が起きやすいと睨んでいる。もしその地域で一番強い人でチームを組めば、関東・関西が圧倒的有利だろう。しかしこの大会は、各地域でチーム戦を行って代表を決めている。いくら個人で強い人間がいても、チームメイトに恵まれなかった場合勝ちあがってこれないのだ。そして僕は、チームメイトに恵まれた。シニア・中学生以下の二人もだが、何より高校生コンビが頼もしい。一人は貴島伸広、高校個人ベスト4経験者だ。今大会で一番強い高校生かもしれない。そして女子代表、こちらも高校生の飯伏佳乃子。代表歴はないものの、県内で貴島君の次に強い高校生である。今回女性の勧誘に苦労したチームは結構あったようで、とりあえず指せる人を誘って、という感じ

で組んだチームも多いと聞く。そんな中県内トップクラスの高校生が女性代表であるというのは心強い。

おそらく、一番厳しいのは一般代表の僕だ。だが、大金がかかっているのですんなことも言ってもらえない。

「しかしなー」

今僕は、ホテルの部屋で詰将棋を解いている。今さら悪あがきとも思うのだが、何もせずに後悔するのは嫌だった。将棋に神経を集中させるのはなにより、こんな状況に陥ってしまった自分への戒めなのである。

親はちゃんと仕送りもしてくれていたし、来年の学費分も振り込んでくれた。たとえ今年優勝できなくても怒られることはなかったし、ずっと優勝できなくても実際には何とかしてくれただろう……と思う。ただ、僕はとても馬鹿だった。元々勉強をさぼりまくっていたのだ、大学に入って急にまともになるのは無理だったのかもしれない。

授業はとてもつまらないので、サボって部室に行ったりしていた。将棋推薦なのだから将棋頑張っただけ……などと自分に言い訳していた。ただ、その時は将棋をしているだけまだよかったのだ。僕は夏前にオンラインゲームを始めて、ハマった。ダンジョンに潜りモンスターを倒す、アイテムをゲットする日々が続いた。最初はそれほど長時間にわたってやっていたわけではない。ちょっと夜更かしする、その程度だったのだ。

しかし、僕は出会ってしまった。たまたま一緒にパーティーを組んだ女性プレイヤー。たまたま次の日も、同じフロアにいた。チャットを交わすようになり、再会を約束した。毎日のように彼女と話すようになった。僕は彼女に会いたくて、彼女とパーティーを組みたくてゲームをするようになった。けれども彼女はかなり長い時間プレーしているようで、僕よりもレベルが上がるのが早かった。レベルが違いすぎると、足手まといになる。僕はレベルをあげるため前よりも長くプレーするようになったが、それでも彼女には追いつけなかった。そしてついに禁断のアイテム……「経験値二倍チケット」に手を出してしまったのだ。通常の二倍経験値が入るこのチケットは、一枚千円、一週間有効だった。一回だけなら……と思ったが一度あの味を知ったらなかなかやめられない。僕は毎週このチケットを買うようになり、さらには「アイテムドロップ二倍チケット」「レアアイテムドロップ二倍チケット」、そしてついには一枚二千円の「昼間経験値四倍チケット」や、キャラクターの見栄えを良くするためゲーム内衣装や表情効果、武器装飾などのチケットを買いまくっていたのである。

泥沼である。けれどもその時は、彼女に会える、彼女に気に入られる、という思いでいっぱいだった。しかしある日、彼女は僕の心を砕く最強の一言を放ったのである。

「いつもありがとう。彼氏にも言えないこと、何でも相談できるから本当に感謝してる」

砕けた。散った。所詮ネットでの関係じゃない、などと言っただけはいけない。僕はそのあと一週間、固形物が喉を通らなかったのである。

現実に舞い戻ってみると、残ったのはお金をつぎ込み過ぎた、という現実だった。ゲームのしすぎで進級すら危うくなっていた。学費免除どころか留年などすれば、怒った親から仕送りを停止させられることだって有り得る。

そして、詰将棋に飽きた。僕の欠点は、少しでも苦手なことは長続きしない点だ。天井から、鏡へと視線を移す。そこには、さえない顔の青年が寝転んでいる。将棋しかとりえのない、しょうもない男だ。けれどもすぐに恋をしてしまう。そう、今僕はあの子が気に入っている。

今は一時帰国中ということだから、どうにかして連絡先を聞かなければならない。幸いにも向こうは僕の将棋に興味を持っているようだから、もっと将棋で目立てばいいのではないか。まずは明日の初戦、格好よく勝つことが重要だ。

最後は眠気に襲われない人間が勝つ。それが僕の信念だ。幸いにも今日は個室で、誰も睡眠を邪魔する奴がいない。僕は詰将棋の本を投げ捨て、布団の中にもぐりこんだ。

「うわー、緊張してきた」

「どうせ佳乃子は計算に入っていないから安心しろ」

「何それー」

高校生カップルが朝からいちゃついている。まったくうらやましい限りだが、飯伏さんが好みのタイプでないことが救いだった。彼女はよく笑い、よく拗ねて、とにかく表情豊かだった。僕はどちらかと言えば、彼女の兄の方をよく知っている。昔から全国大会で顔を合わせており、彼の使う華麗な四間飛車にはちょっと憧れてもいた。

「だって、駿馬が勝つからなあ」

貴島君が、隣でポーっとしている子供の頭を叩く。佐田駿馬、うちの中学生以下代表だ。ほとんどしゃべらない上に、将棋でも駒音をほとんど立てない。終盤になっても焦ることはなく、常に淡々と勝っている印象だ。僕も負かされたことがあるが、相当こたえる。まるでその結果が宇宙の真理であるかのように思えてくるのだ。まあ、それだけに頼りになる仲間である。

「しかし人が多いなあ」

やたらときよろきよろしているのは、シニア代表の久木野さん。「昔は代表クラスだった」が口癖だが、真偽のほどは不明だ。強豪に当たったら苦しいだろうが、筋の良さにはうならされるところがある。期待していいだろう。

僕らはAグループの第二対局場で戦うことになっている。手前から一般・シニア・女性・高校生・中学生以下の順に並んで戦う。持ち時間は30分、切れたら一手30秒未満。県大会の決勝などではよくある設定だ。

すでに相手チームは全員着席していた。僕の前には白髪の中年男性、ハッサンというらしい。シニアは金髪で顎髭の立派なケビン。女性は水色のワンピースが可憐な麦野さん。高校生はこちらも帰国子女か、背が高く、淵なしメガネがおしゃれな佐々岡君。そして中学生以下はくりくり坊主が愛らしい少年、楊君だった。会場の中でも特に目立つこのチームは、二つの意味で特別だった。一つ目は、このチームだけは予選を戦っておらず、個人個人が招待されているという点だ。そして二つ目は、ほとんどその将棋の内容が知られていない点である。全てが未知数なので、作戦を立てようもない。

「とりあえず、頑張りましょう」

そう言って、僕らは席に向かった。

斜め右、どうしても麦野さんが気になって、ちらちらとみてしまう。そして、向こうが顔を上げた瞬間に目が合った。にっこりと、微笑んでくれた。心臓が体の中で徒競走をしているみたいになった。

駄目だ駄目だ。この対局はお遊びではない。学費免除がかかった大事な勝負なのだ。

前だけを意識する。ハッサンはすでに駒を並べ始めている。僕も、駒をつまむ。どちらかという、ゆっくり並べる方だと思う。相撲で言えば、塩をまいているような時間。集中力を高めていく。

大会主催者の挨拶があり、さらにゲストのプロ棋士が面白おかしいことを言っている。が、まったく笑えない。九割は次の対局、残り一割は女の子とのことで頭がいっぱいだからだ。

今は去れ、一割。

「では、一般代表の方は振り駒をして先後を決めてください」

手で合図して、相手に振り駒を促した。年上の方に譲るということもあるし、その手つきから慣れ具合を探りたい意図もあった。そしてハッサンさんは、すらすらと歩を五枚つかむと、シャカシャカといい音を立てて駒を振った。

と金が五枚。こちらの奇数先だ。僕、飯伏さん、佐田君が先手になる。

「それでは、よろしくお願いします」

「ヨロシクオネガイシマス」

会場が挨拶に包まれ、対局が始まった。

ハッサンさんは真ん中に飛車を配置して、穴熊に組んできた。少し損な指し方だが、実戦的でもある。こちらも穴熊に困う。この時玉と反対側に駒が残るのが中飛車穴熊の欠点だ。

僕はよく「特徴がない」と言われる。序盤が特にうまいわけでも、終盤の切れ味がいいわけでもない。確かに一局一局を見ればそうなるが、実は総合すると「苦手な戦型を作らない」というのが僕の特徴だった。オールラウンダーというわけではなく、相手の作戦に乗りながらも、こちらが損をしない局面に常に持っていくのが得意なのだ。だから常に互角にすることを心掛けている。序盤からちゃかちゃかしたことを仕掛けてくる人には、これだけで結構な攻撃力がある。相手の心をわしづかみにして、決してペースをつかませない。それが僕のやり方なのである。

だから使い慣れているであろう中飛車穴熊相手にも、じっくりと組んで仕掛けを匂わせながら形を整えていく。相手が仕掛けたとたん、その反動でこちらからも攻めが決まる仕組みだ。相手も警戒しているようで、長考に沈んだ。

他の対局を眺める。隣のシニア対決は、角換わりの激しい将棋になっている。久木野さんがさすがの切れ味で、これは勝てそうだ。そして女性対決はびっくりした。飯伏さんいつもの四間飛車穴熊に、麦野さんは玉頭位取り。網が破れるとひどいことになるものだが、今のところ完全に抑え込んでいる。正直海外招待の女性がここまで指せるとは思わなかった。

その向こうは遠くて見えない。ただ、想像以上に手ごわい相手という気がしてきた。もし海外最強チームがしっかり組まれているとしたら、かなりの強敵になる、そういう時代になっているのかもしれない。

自分のところは、相手の持ち時間が切れて秒読みになった。こうなればこっちのものである。焦ったハッサンさんは無理な端攻めを仕掛けてきた。これは典型的な自滅パターン、端を逆襲してじわじわと痛めつけていく。ほどなくして、必至をかけて勝負あり。

「アリマセン」

ハッサンさんは深々と頭を下げた。一勝。

席を立つと、貴島君が歩み寄ってきた。

「どうだった」

「俺は勝ち。駿馬は負けました」

「え、佐田君が？」

「相手は今度奨励会を受けるらしいです。五段はありそうでした」

「そうか……」

これで現在二勝一敗。あと一勝すれば勝ちだが、状況は楽観できない。シニア対決は形成が混とんとしてきていた。ケビンさんの玉がするすると中段に逃げて、捕まりにくくなっている。女性対決は絶望的だった。飯伏さんの玉は堅いが、それだけだ。全ての駒が抑え込まれて窮屈になっている。麦野さんは無理をせず、一步一步リードを広げていく。顔つきは凜として、手つきもしなやかだった。完璧だった。将棋の女神が降臨していると思った。

ケビンさんの入玉が確定し、久木野さんが駒を投げた。僕は絶望的な気分だったが、飯伏さんは唇を噛んで必死に指し続け、貴島君もまじめな顔をしてずっと見守っていた。人だかりができて始めた。皆も海外招待チームの実力に、そして若くて美しい帰国子女の姿に気が付いたのだ。

飯伏さんは頑張った。最後まで頑張りぬいた。それでも、全然届かなかった。最後は惚れ惚れする寄せで、玉を詰まされた。

「……負けました」

目元に浮かぼうとする涙を、なんとかせき止めているのがわかった。チームの負けも悟っているだろう。ただ、仕方がなかった。麦野さんが強すぎたのだ。

「よく粘ったな」

貴島君が声をかけていた。彼に任せるのが一番だろう。そして、まだまだ対局は続くのである。

2回戦の相手は中国代表。ここは、高校チャンピオンを要していた。貴島君が負けたものの、僕、久木野さん、佐田君が勝って3-2。心配なのは飯伏さんの手が伸びていなかったことだ。十回やったら七回は勝てる相手だったと思う。ちなみに海外招待は北海道代表に4-1で勝っていた。これは本物だ。

3回戦の相手は関西第一。アマタイトル経験者が一般代表で、僕はいいところなく負けた。悔しいが実力通りだ。さらに小学生も全国ベスト4の強豪で佐田君が負け。ただ久木野さん、貴島君は貫録を見せて勝ち、女性代表はほぼ初心者だったようで、飯伏さんも楽に勝っていた。何でもいい、勝てば流れが変わるのだ。3-2勝ち。海外招待は関東代表にも3-2で勝っていた。

一日目が終了して、一位は勝ち点3、勝ち数10の海外招待。二位は勝ち点2、勝ち数9の関東第二。そして三位が勝ち点2、勝ち数8の九州となった。二位までが決勝トーナメントに進めるシステムなので、関東第二に勝つことはもちろん、勝ち数もできるだけ稼ぐことが重要だ。

チームとしては、全員が勝ちも負けもあった。明日までにどのように気持ちを準備できるか、だろう。

夕食は皆でカレー屋に行った。よくわからないが、団体戦ではカレーを食べるのが儀式みたいになっている。負けた人はたくさん食べなければならないのである。

二日目が始まった。午前二局、午後決勝トーナメントの二局が行われる。昨日わかったのは、なるようにしかならない、ということだ。力の差が歴然としている場合、負けるのは当然だと受け入れるしかない。団体戦で重要なのは、勝つべきところで勝つ、ということなのだ。

集まったメンバーは、みんなそこそこいい顔をしていた。飯伏さんが心配だったが、時折笑顔も見せ吹っ切れているようだ。

四回戦の相手は関東第二。海外招待に負けたものの、総合力は高い。何より表情が垢ぬけている。都会もんには負けたくない。

僕の相手は知らない人だったが、ここまでは全勝のようだった。中年のがっしりした人で、喧嘩でも強そうだ。むんずと王将をつまんで自陣に引き寄せせる。僕は、そそくさと玉将を手にした。

僕の後手で対局が始まった。戦型は相矢倉。こうなるとひたすら耐え抜くことを決意しなければならない。だが、耐えがいてもある。アマチュアでは、守っている方が有利なことはいくらでもある。時間が切迫すれば、攻めてる方が間違えやすいというのが僕の持論である。

そして、予想した通りの展開になった。端からの猛攻を受けたものの、するすると玉が逃げ出すことに成功。あとは入玉してのんびりできそうだ。ほどなくして、相手が投了した。ふと斜め上を見ると、貴島君が右手の親指を立てていた。隣で飯伏さんも頷いている。

「勝利投手です」

「よし」

久木野さんは負けていたようで、虚空に向かってぶつぶつとつぶやいていた。佐田君は最後まで粘っていたが、即詰みに打ち取られた。

3-2勝ち。海外招待も勝って全勝をキープ。最終戦で二位を目指した戦いになる。

五回戦の相手はここまで1勝の北海道代表。1敗がうちだけなので、勝ちさえすればいい。そして、普通にやれば勝てるはずなのである。

ただ、こういう時はえてして危ないのである。対局が始まり、気が付くとかなり形勢が悪くなっていた。どこで間違えたのかわからない。二敗になったらどうなるのか、頭の中で答えの出ない計算がぐるぐる回る。対局に集中しなければ。粘る。学費が足りなくなったら……。粘る。も

しあの時彼氏と別れるのを待つぐらいの根気があれば……。粘る。そもそもネットゲーム等にはまらなければ……。くそ粘る。

どれぐらい時間が経ったのだろう。むき出しになった玉将は、行き場を失って仕方なく斜めを向いていた。飛車で王手されるが、適当な間駒がない。頭を下げた。

「負けました……」

体中の血流が渦巻いているようだった。立ち上がると、メンバー四人が僕のことを見ていた。

「お疲れ様です。勝ちましたよ」

飯伏さんが、前に貼られているリーグ票を指さす。九州代表、勝ち点4、勝ち数15、順位2位。どうやら、僕以外は皆勝ったようだった。仲間に、救われた。

そして、最終戦に海外招待は負けた。それにより関西第一は2敗ながら勝ち数が同じ15になっていた。もしあと二人うちが負けていたら、逆転されていたということだ。

何はともあれ、決勝トーナメント進出。午後からは、絶対に気を抜かないようにしなくてはならない。

「榎田さん」

「あ……麦野さん」

決勝に向けて、詰将棋を解いていたところだった。僕の前に、素敵な黄色いワンピースの女性がやってきた。

「お互い、残れましたね」

目を大きく開いて微笑む様子に、僕はいろんな負の感情が全て吹っ飛んでしまった。なぜ自分がここにいるのかもよくわからない……が、かっこいい将棋を見せたいとか、次勝てばもう一度対戦できるかもしれないとか、そんなことはすぐに思いついた。

「そうですね」

「頑張りましょうね」

かくかくと顎を上下させて頷いた。頑張るに決まってるじゃないか。

決勝トーナメント一回戦は、Bリーグ一位との対戦である。関東第一、予選は全勝で、勝ち点は22。つまり、全部で3敗しかしていない。とんでもないチームである。

なんといっても一般が元奨励会三段、アマタイトル多数の谷繁さんである。当然のようにここまで全勝。小学生は県代表にもなった金城君、全勝。さらには女性が元育成会員の池永さん、全勝。この三人のうち少なくとも一人を倒さないと、チームの勝利はない。

圧倒的不利だが、やるしかないのである。奨学金免除がかかっていることも、対局開始までに何とか思い出すことができた。

振り駒で、先手になった。谷繁さんは軽快な振り飛車党、ゴキゲン中飛車にしてきた。僕はこれには用意の急戦があった。いわゆる5二金右急戦と呼ばれるものだ。決戦の権利は向こうにあ

るが、避ければ避けたでこちらの気分がいい。上位者は避けることが多いものの、谷繁さんは決戦を挑んできた。向こうも自信があるのだろう。

予想通りに進んでいく。これはこちらが勝つ流れだ。隣をちらりと見ると、久木野さんも得意のよくわからない展開に持ち込んでいた。飯伏さんのところはまだ普通の序盤だった。

谷繁さんの舌打ちが聴こえた。苦戦を意識しているに違いない。この戦型を選ぶ人はプロの実戦に明るい人が多い。だが、プロには見えないところに筋の悪い好手が隠されていることもあるのだ。僕のようなどこまで行ってもアマチュアでしかない人間は、そういう好手を掘り当てて上の人に食らいついていく。元三段の強豪に勝てるとしたら、チャンスがあるとすれば、こういう流れしかない。

中学生の頃を思い出した。強くなり始めた僕は、一時期プロを意識した。周りに誰も僕より強い人がいなくなったのだ、夢見ても変じゃないと思う。けれども大会に出てみると強い人はいっぱいいて、ショックだった。負けたくなかったから頑張った。でも、県で一番になっても全国にはまだまだ強い人がいた。将棋をやめることはなかったけれど、僕は結構早めに一番になることを諦めていた。

推薦の話が来た時、本当にびっくりした。そして優勝を目指すことが前提になっていて、最初は戸惑った。錆び付いた夢を洗い直さなければならなかった。見た目だけは繕ったけれど、結局僕はダメだった。オンラインゲームにはまり、年度末になってやっと焦っているありさまだ。

盤の前に向かったら頑張ってしまう。だから、頑張り続けられると勘違いしてしまう。

局面は思った以上にややこしかった。何せどちらの玉も薄いのだ、見落としがあればすぐに寄ってしまう。馬で桂馬を食いちぎられ、その桂馬をすぐに攻めに使われる。どんなに駒を得しても、詰まされたら負けなのだ。そして詰ますことに関しては、相手の方が何枚も上手だった。予想外の捨て駒が飛んでくる。逃げ道を塞ぐ、華麗な手だった。

正解はどこだろう。授業料のことも、麦野さんのことも、忘れていたわけではない。ただ、やっぱり一番は、負けたくないという思いだった。自分にとって最高の条件で序盤を乗り切ったのだ。それをこんな簡単に、人をあざ笑うような手でひっくり返されてたまるか。

僕は、自陣飛車を打った。美しくない手だ。けれども、一番強い手だと思った。谷繁さんが小さくうなった。この手は読んでいなかったのだろう。

機械が秒読みの音を浴びせかけてくる。終盤が強いと言われる人の多くは、秒読みに強いのだ。慌てた手つきながらも、谷繁さんは致命的なミスを犯さない。手が覚えている、と表現する人もいる。僕は、頭でしか指せない。

長引いたものの、敗北は決まっていた。脳が諦めても、心が諦めない限り指し手だけは続いていく。

「負けました」

自分でも気づかないうちに、その言葉を発していた。玉が詰んでいる。脳が、心を抑え込まざる得ない局面だった。

立ち上がり、周囲を見回す。女性対決だけがまだ続いていた。

「お疲れ様です」

貴島君だった。

「どうなってるの」

「俺だけ勝ちで…… 1 - 3 です」

「そうか……」

僕の負けで、敗退が決まったのだ。優勝は、消えた。

残った一戦。池永さんの顔が真っ赤になっていた。局面を見ると、振り飛車がかかり指しやすそうだった。穴熊が固く、駒損しているものの二枚のと金がいい位置にいる。飯伏さんは盤面にまっすぐ目を向けており、ギャラリーの視線など全く気付いていないようだった。僕は少し、見ているのが辛くなった。高校生の時に、僕はこんな必至な顔をしたことがあっただろうか。

十分後、飯伏さんは勝った。大金星だろう。チームは2 - 3。僕が勝っていれば、チームも勝ちだった。

「よくやったな」

「疲れたー」

高校生二人の爽やかな笑顔は、とても眩しかった。

とにかく、終わった。僕の大学一年生は、優勝なし。来年の授業料免除もなし。充実感も、なしだった。

決勝戦が終わった。4 - 1で関東第一の勝ち。圧倒的だった。最後、ついに麦野さんも負けた。池永さんも、意地を見せたのだ。

僕らも三位の表彰を受け、ゲストの先生が締め挨拶をし、大会は大成功のうちに終わった。

だが、僕にはもう失意しかない。学費のこと、将棋のこと、そして……

「うん、うん。わかるよ。うん……楽しみ。久しぶりだもんね……」

廊下で電話をしていたのは、麦野さんだった。満面の笑みで、首を縦に振っていた。

何度も男性の名前を呼んでいたし、それでなくたって声のトーンでわかる。チャットではわからなかったが、いくら鈍い僕でも、声なら分かる。

結局は、何事もそう簡単にはいかないのだ。バイトをして、将棋を頑張ろう。とりあえず、決意をする。

「あ、榎田さん、お疲れ様でした」

「お疲れ様。惜しかったですね」

「完敗でした。でも楽しかったから、また出たいです」

「僕も」

「じゃあ、また来年。……あ、行かなくちゃ。失礼します」

走り去っていく黄色いワンピース。この光景を、早く忘れられるといいな。

第一回将棋混合団体戦ファルタ杯は、夢を見させてくれたし、現実も教えてくれた。うん、確かに楽しかった、ような気がする。

でもなんか、徐々にネットゲームをやりたい気分であった。



駒. zone vol. 4

神様とミルフィーユ

神様とミルフィーユ

清水らくは

僕の家に居ついた神様は
勝手にミルフィーユを食べてしまった
神様なので文句も言えない
しょうがないので将棋を教えてもらおう
ただ　すぐ追い越した

神様は将棋が弱い
けれどもすごく楽しそうだ

僕は大会で優勝した
家に帰ると神様は微笑んで
少し分厚い盤をくれた
神様のことが好きになった
二枚落ちで将棋を指した
僕が勝った

僕はプロを目指した
親は反対だった
友達も笑った
神様だけが応援してくれて
いつも微笑んでくれた
強い人ばかりで
負けることが多くて
泣いて帰っても
神様だけは優しくて
だからいつも僕は
ミルフィーユを買って帰った

月日は待ってくれなかった
みんな先に進んで
みんな追い越して行った
僕は年齢を重ねて
大人になることを忘れていた
何度も分厚い盤に
分厚い涙を落とした

僕がプロを目指さなくなった日
貰って帰った駒を
盤に置こうとしたら
ミルフィーユが二つ乗っていた
神様が微笑んで
「もう一回将棋を楽しもう」
そう言ったから
僕は確信した
将棋の神様はずっとそばにいた

二枚落ちで
初めて僕に勝った日
神様は泣いた
僕は笑った

一般棋士2.0

将棋がブームだと言われる。多くの人が将棋を指し、観戦し、将棋について語り合う。その熱は日ごとに増しているように感じられる。ただ、ブームはいつか終わる。以前も羽生七冠の誕生によりブームと呼ばれた時期があった。子供を将来プロ棋士にするため、無理やりルールを教え込み大会参加させる親のドキュメンタリーなども放送されていた。しかしその後、ブームはしぼんでいった。羽生七冠はすぐに六冠になり、将棋棋士を目指すことはマイナーな夢に戻ったかに思える。

あの頃のように、将棋に対する熱はすぐ冷めてしまうのだろうか。確かにいつまでも膨らみ続けるブームというのは存在しない。しかし多くの方は、「今度は少し違う」と感じているのではないか。何が違うのか。本稿では、そのことについて検証する。

以前は「将棋ファン」といえば、将棋を指す人のことであった。道場や学校、職場のクラブで将棋を指す人々は、その延長としてプロの将棋に興味を持ち、雑誌や本を買っていた。将棋を指していてもプロの世界を知らない人は多くいた。逆に、将棋を知らない人にとってプロの世界はほとんど知られていないものだった。

そんな中、私が最初に状況の変化を感じたのはネット掲示板と、将棋に関するホームページの登場だった。掲示板に将棋ファンが集い、特定のテーマについてスレッドを立て、語り合う。そのことは情報の共有化をもたらした。中にはアマチュア将棋界についてのスレッドも立ち、大会の速報や特定地域の状況などについても知ることができた。あるプロについてのスレッドが立てば、そのプロのプロフィールや成績、今後のスケジュールなどを知ることができ、ファン同士で応援の言葉を掛け合ったりもできるようになった。またホームページが作られることにより、様々な将棋コミュニティの状況も知ることができるようになった。私も大学の部のホームページ管理人をしていたので、他大学のホームページを巡ってかなり研究した。普段全国大会に出られないような部のことは、ホームページができるまではほとんど知ることができなかった。しかしホームページにより、その部の成績、部員数、普段の活動や部員の趣味まで知ることができるようになった。

インターネットにより、様々な将棋コミュニティが結びつくこととなった。また地域に一人きりの将棋ファンが、地域を越えてコミュニティを作ることができるようになった。将棋を知るきっかけも増えたが、将棋を続けるモチベーションの維持にもインターネットは寄与したはずである。そして、その最たるものがインターネット道場の登場だった。インターネット道場は、世界中の人々が無料で将棋を楽しむ場を提供した。わざわざ地域の道場やクラブを探さなくとも、将棋を楽しむことができるようになったのである。

インターネットがもたらした入口の多様化と情報や楽しむ場の共有化により、将棋ファンは増え、やめるファンは減ったはずである。しかし、それはブームを呼び起こすうえでの土台に過ぎなかった、と私は考える。ここまで述べてきたのは、インターネットを利用してファンが作り上げてきたものについてであった。しかし本当の変革は、将棋を魅せるプロたちの側が動いた時に訪れた、と私は考える。

最も大きな変化は、インターネット中継である。それまでプロの将棋は、リアルタイムからはかけ離れた見せ方をされていた。ある時に指された将棋は、時間が経ってから新聞や雑誌に棋譜が載せられる。連盟ホームページができて結果だけは次の日に知ることができるようになった。しかしその将棋の中身がどんなものだったか、棋士はどんな様子だったか、どれくらい時間がかかったのか、何も知ることができなかったのである。

これだけならば、他の競技と変わらない、と感じるかもしれない。マイナーなスポーツなどはテレビ中継もなければ、次の日の新聞に結果が載らないことだってあるだろう。しかし、ほとんどの競技には観客席がある。現地まで行く、お金を出すなどの労力を払えば、リアルタイムで楽しむことができることである。将棋にはそのような楽しみ方がなかった。現地で数分だけ見学できることや、A級最終日のテレビ中継などはあったが、非常に限られたものでしかなかった。インターネット中継ができたことにより初めて、将棋は観客席を手に入れたのである。

インターネット中継により、私たちは将棋が行われている現場にリンクできるようになった。棋譜が更新されることは、更新されない時間をも実感させてくれる。それまで「1時間の考慮時間」はぼんやりとした「長いなあ」という感想しか導き出さなかった。しかし1時間実際に棋譜画面が動かないことにより、私たちはその時間の長さを1時間かけて味わうことができるのである。「深夜に及ぶ激闘」も、実際に深夜眠たい目をこすりながら見ることにより、非日常的な長さで戦っていることが感じられるのである。

さらにネット中継は、現場の空気感まで伝えてくれる。将棋会館の部屋割り、棋士の衣服や持ち物、控室の様子。これらは新聞記事であっても多くが削り取られていた部分だろう。それらの多くが見えるようになるにつれ、ファンはその現場に対してさらに多くの興味を持って行ったはずだ。そしてプロ棋士一人一人の個性も可視化され、棋譜だけではわからない魅力に取りつかれていった人も多いだろう。

ネットの登場により、プロ将棋の見られ方は変わった。そして見せることが仕事である以上、そのことはプロ棋士の在り方自体を変えたともいえる。それまでの棋士は、棋譜が文字化されることで商品を作り出していた。中にはファンの目に触れる棋譜がほとんどない棋士もいたはずで、ファンのほとんどがその人を知らないということすらあり得た。しかしインターネットにより、ほとんどの棋士の情報を手に入れることができるようになった。将棋年鑑や新聞をしらみつぶしに探さなくとも、インターネットで検索することにより全ての棋士の棋譜や人となりを知ることができるようになった。そしてネット中継の登場により、全ての棋士はリアルタイムで中継される対象となった。少なくとも順位戦に参加している棋士は年に複数局が中継されるし、モバイル中継の登場によりそれ以外の棋士も中継の対象となった。

棋士は自らの棋譜だけではなく、自らの在り方を売ることになった。それは一部のスター棋士だけではない、一般棋士もがそのように変わったのである。ネット中継以後一般棋士の在り方が変わったことから、ここではかつての一般棋士を一般棋士1.0、新しい一般棋士を一般棋士2.0と呼ぶことにしたい。

一般棋士2.0とは、どのような存在なのか。

棋譜以外も見られるということは、その人自身の魅力が伝わりやすいということでもある。たとえば意外とファッションにこだわっているとか、様々な飲み物を用意しているとか、相手に気を遣っているとか、そういうこともファンにとっては興味の対象なのだ。ただ、いいことばかりではない。棋譜だけならば好感が持っていたのに、対局態度は...などという感想を持たれることもあるだろう。しかしこれはプロの競技者ならばほとんどの者が有しているリスクである。私たちはプレイヤーの出す結果だけを楽しみにスポーツを見たりはしない。ガッツあふれる姿勢やファンに対する気配り、活躍後のパフォーマンスなど、多くのことが興味の対象になる。この意味で一般棋士2.0は、他の競技選手がもともと有していたアドバンテージやリスクを遅ればせながら持つようになったのだ、と言える。

一般棋士2.0は、当日見られていること前提のプロモーションなどをするようになる。例えばブログで記事を書くときなどは、「(みなさんご存知のように)昨日の対局は.....」と書くことになる。これまでならばファンは知らないことが前提だったのだから、これは大きな変化と言えるだろう。また、対局の前に準備を知らせることもできる。研究会のことや就寝時間など、どんなことも対局当日に「ああ、あのことがここにつながっているのかも」とファンに思ってもらえれば、情報を商品の一部とすることに成功しているだろう。

さらにネット中継は、ファン同士の結びつきも変えた。ここには、ツイッターなどのSNSが大きく関わっている。掲示板と違い、SNSにおいて人々はある程度の自己同一性を維持したまま、姿の見えるファンとして発言している。たとえ匿名であろうと、あるハンドルネームで発言する人はそのハンドルネームに裏付けされた特定の個人なのである。そのような個人と個人が、現在行われている対局について感想を述べ合ったり、情報を交換したりすることができる。現場と観客席というリンクだけでなく、観客席の中でリンクが様々にめぐらされるようになったのである。

そしてここでは、プロ棋士や将棋に関係する人々も参加して、「将棋に触れた人たち」の大きな関係性の渦が生じている。今行われている対局について、ファンとプロ棋士とネット中継者が語り合うということが起こっている。一般棋士2.0は、これらさまざまな人々の関係する場において、更なる魅力を引き出してもらっていると言える。

一般棋士2.0は対局以外でも一般棋士1.0と異なる見られ方をするようになった。例えば大盤解説会や将棋祭り、全国大会での指導対局などは、一般棋士1.0においてはその場限りの仕事だった。その日棋士が見せたものは、現場にいた人だけが享受するものであった。しかしファン同士の結びつきが強くなったことによって、イベントにおける棋士の様子が多くの人に伝えられるようになった。決して将棋では活躍していると言えない棋士が、解説や指導では名人級であることなどがファンの間に周知される、などということが起こるのである。無論逆に悪い面が知られてしまう、ということもあろうが、SNSではおおむね好意的な意見が伝えられているように感じる。ファンも隠された魅力をこそ知りたいと思っているのだろう。

一般棋士2.0は、より多くの可能性を秘めた存在である。ただし、棋士にとってプラスとなることばかりではない。一般棋士2.0は、自発的にバージョンアップしたのではない。インターネットの発達により、そのようになっただけである。一般棋士2.0は自らを売り出す機会を多く持つようになったが、その分それまで売ることができた情報を無償で提供し

ているのである。以前であれば専門誌などにしか書かれていなかった情報が、今はネット上に蓄積され簡単に閲覧することができる。一次情報の多くは、それだけでは売り物にならないのである。また、ファンの間でも簡単に情報は交換され、その場で盛り上がるることができる。このとき、棋士に対して何らかの還元がされることは一切保障されていない。そして対象は、プロ棋士である必要がない。対象がアマチュアでも創作キャラクターでも、ファンにとっては楽しめるばいのである。一般棋士2.0がバージョンアップを生かすには、様々な対象の中で自らこそが魅力的であるということアピールできなくてはならない。

それでもプロ棋士はかけがえのない存在である、と思うかもしれない。しかしインターネットの発達、他のジャンルではプロとアマの垣根を壊してきた。例えばニコニコ動画では、アマチュアの音楽作品や、そこから派生したPV、ダンスなどの作品が大変支持されている。作品に対して、有料の広告ポイントが投入されることもある。また、そこで実力を試すためなどに、プロであることを隠して作品を投稿する者もいるという話である。

将棋においても、このようなことが起こらないとは限らない。例えば現在行われているニコニコ生放送での解説は、プロでなければできないものだろうか？ 初心者を対象にしたアマ高段者の解説や、自らも初心者である「観戦実況」のようなスタイルの、表現方法を凝ったビジュアル的な生放送など、可能性は様々に考えられる。観る方は決して最善手を解説してほしかったり、プロの見解を聞きたいとは限らないのだ。そして「魅せる」という意味では、プロ棋士以上に達者な人たちはたくさんいるのである。

プロ棋士2.0は、対局以外の時には様々な対象と競争しなければならなくなる。将棋自体は以前よりもより広く深く受け入れられるかもしれないが、プロ棋士がプロ棋士として将棋で生きていくには、以前よりも多くの障壁が増えたと言えるかもしれないのだ。

障壁は、実はファンの側にも増えている。現在ファンは、地域を越えてネット上で交流することが可能である。それまではなかなかイベントや道場に行けなかったり、書籍を購入できなかった人たちが、掲示板やネット道場、SNSを通して簡単に交流することができるようになった。しかしそれはあくまで、ネットという新しい場ができたということであって、それまであったものが代替されたわけではない。現代に至っても相変わらずプロの対局、イベントなどは、ある人にとっては非常に遠くで行われている。そしてネットの交流によってそのことを強く自覚させられる。さらには、ネットの交流によってイベントが行いやすい地域でのイベントがさらに増え、地域間格差が広がる様を確認すらできてしまうのである。

このことは、将棋以外でも見られる現象である。例えばボーカロイドはニコニコ動画などインターネット上での活動を元に、地域に関わりなく、時には国境を越えてクリエイターやファンの交流を生んできた。田舎であろうとお金が無かろうと、インターネットにつながればボーカロイドの世界を楽しむことができるのである。しかしそれにもかかわらず、ボーカロイドマスターなどの「直接会」イベントも大きな交流の核となっている。そこでは人々が直接会って交流し、自主制作CDという「もの」を売ったりしている。ネット上の交流はあくまで一つの局面であり、現実世界での交流が廃れたわけではないのである。そしてネット上の交流により、現実世界での交流もしやすくなり、イベントがより大きく深いものになっていくことができる。このようなイベントは都市圏で開催されるため、イベント開催中は地域間格差を鮮明に感じ取る人々が出てくる。また子供であるため、貧乏であるため、多忙であるため、人付き合いが苦手なためにイベントに行けない人たちも、行ける人との格差を感じざるを得ない。ボーカロイドマスター当日には、行けない人たちがネットで「エアボマス」と称し行ったつもりになって交流をするほどである。

将棋においても、このような傾向は見られる。タイトル戦や将棋祭りなど、各地で開催されるイベントもある。しかし新たなイベントなどはどうしても都市圏で開催される傾向にある。都市圏であればネット上でのファン同士の交流を基盤として、参加人数を確保しやすいのである。さらにプロ棋士は東京か大阪での対局をするために、どちらかに出やすい場所に住んでいる場合が多い。ファンよりもさらにプロ棋士の分布には偏りがあるとみて間違いないだろう。そのためにプロ棋士参加のイベントとなれば、開催場所も偏りがちになる。

せっかくファンが増えても、地方在住のファンはプロ棋士にお金をかける機会自体が少ない、ということになってしまう。それを解決するために、ネット上で課金する制度を増やすというのは解決策になるだろうか？ ファンは際限なしにお金を出すことはできない。「イベントに行けないから質の低いものにもお金を出すか」などと考える人はまれである。地方の人も満足させるには、無料の情報を増やすしかない。結局のところ、「より払う人からより多く」というスタイルを変えることは困難なのである。

このことだけでは、ただ単に「今までと変わらない」に過ぎないと感じるかもしれない。しかし、一般棋士2.0は新し

い対応を迫られている。なぜならネット上の反応も、多く見えるのは都市に住んでいる者から発せられているからである。イベントに参加できる人間からは多数の発信があるが、行けない人間が延々と行けないことについて語るということは少ない。そのため「好意的な反応が多数である」→「みんな満足している」と感じてしまうことにつながる。ネット上では、不満を隠して交流を楽しむ、という人も多いただろう。「地方にいる人もネットで参加している気分になっている」というのは一面では事実かもしれないが、あくまでネット上で楽しむのはその人にとって次善の策ということが多いただろう。しかし、ネットから様々な意見を拾うことはできる。それはある程度積極的な作業となるが、好意的な意見ばかりでなく様々なファンのニーズに対してアンテナを張っておく棋士こそが、新しい在り方としての一般棋士2.0を生かしていると言えるだろう。

この地域格差は、ファンの問題だけにとどまらない。プロ棋士になるにも、どこに住んでいるかは重要な問題なのである。インターネット道場の活用により、実戦の機会の地域格差は劇的に縮まった。しかし地方在住者にとって、将棋会館までの物理的な距離は残されたままである。プロ棋士になるには奨励会を抜けねばならず、そのためには定期的に東京か大阪の会館に行かねばならない。地方の者にとって、これは金銭的にも体力的にも大きなハンデである。このことが原因で挑戦を諦めた者、年齢制限を前にして退会を決めた者もいるだろう。

プロになる為に養成所に入る競技などは存在するが、何年もかけて通い続けるという分野は珍しい。しかも小学生の頃からその競技のプロを目指すのか決めねばならないのである。このことは他に類を見ない、将棋界独特の問題を含むと言っている。プロになった者は故郷を離れる場合が多い。三段リーグを抜けるほどの若手は活躍するため対局数も多く、研究会のことなどを考えても東京・大阪に住むのが自然であろう。このように地方の子どもたちはプロに接する機会が少ないという事態も生じる。

今後、普段の対局や奨励会が必ず東京・大阪で行われなければならないのか、ということが問題になってくるかもしれない。むしろ、問題にならなければならないだろう。一般棋士2.0はネット上でも商売をすることができるだろうが、ネット上だけで活躍するというのは難しい。ネット上で生まれた興味を実際の対局や指導、イベントに結び付けられてこそ多くの棋士が「将棋だけで」生きていくことが可能になるだろう。地域間の格差のみならず、年齢や性別、語学力といったものも障壁でなくなることが望ましい。

実際、個々の棋士においては、時代に対応すべく様々な試みをしているのである。しかし、「誰かが生き残り、誰かが取り残される」というような状況はプロ棋士にとって望ましくはないだろう。時代の追い風をどのように生かし、文化を担う集団としてどのように振る舞うか、それが大事である。ファンとしても棋士が棋士らしくいられるよう、集団として発展(最悪でも残存)するよう願っているはずである。そして私が見る限り、集団としてのプロ棋士は、ネットが生んだ新たな局面にうまく対応できているようには見えない。それは公式ページなどに行っても情報が得られにくい、今後の予定についてアナウンスが遅いもしくは間違っている(最悪ない)、テレビ棋戦などの対局結果が公式にネタバレしている、誤字脱字等ミスのある中継棋譜がそのままにされている……などの単純な局面を見てもわかることだと思う。しかし将棋以外でも多くの集団が対応できていないのだから、悲観的にならず今後何ができるかを考えていけばいいのである。

具体的には何ができるだろうか。まずは情報収集が必要である。積極的にもたらされるコメントなどではなく、消極的なファンの反応を集めることが重要である。ブームを支えている人の多くは黙っており、流動的である。彼らがどのようなところで将棋に時間を割くのかを知るべきである。たとえば棋譜やブログなどが何時ごろよく見られているのか、誰のものが見られているのか、またリピーターがどれぐらいいるのかなどを解析することができるはずである。有料サイトに関してはそこに加えて、どのような課金の仕方をしているか、どのような人が課金をやめたのかを知るのも重要である。このようなことはすでに行われているかもしれない。しかしそれを元に何か変化がもたらされている局面は見られていない。

また、いろいろなものを売りに出してみる、というのはどうだろうか。例えば、現在公開されていない棋譜を一つ10円で売るのである。当分はそれで儲かるかどうかではなく、どのようなものが売れるか知ることが重要である。加えて、解説付き棋譜を20円にするなど、付加価値にも値が付くような形式も面白いだろう。ファンがどのようなものを求め、どこにお金を出すのかが見えてくるからである。

プロの側がニーズを作ることも重要だが、すでに生まれているニーズを市場に出すことこそ一般棋士2.0にできることなのだと私は考える。プロ棋士は多くの棋譜を作り出し、多くの個性的なふるまいをしている。しかし、それらの多くは隠されたままである。それらは隠すことによって価値が生まれるというよりは、ネット以前にはすべてを出すことがと

でも想定できず、ネット以後もそのまま放置されているものである。プロが作り出す作品である棋譜を全て見える状態にするだけでも、将棋ファンはこれまでと違う楽しみ方を見つけ出していくことだろう。

また、すでにあるものの見せ方を変える、という方法も有効だろう。対局中継が深夜に及ぶことなどは観戦者の不満となることも多い。対局開始時間を早める、などは最も単純な変化だろう。また対局をする曜日も検討の対象となるはずである。人々がより観戦しやすい曜日を考えれば、土曜日などに持ち時間の長い対局を中継するなどの変化は十分意味のあることだろう。

さらには、対局場所の変更……対局の巡業なども面白いかもしれない。例えばある棋戦のリーグを地方のホテルで連日開催し、そこで指導対局や小さな大会、現地解説会などをする。プチタイトル戦のようなものである。非現実的に思われるかもしれないが、そもそも東京と大阪でしかプレーされない競技こそ珍しいのである。応援する棋士の対局姿をタイトル戦でなくとも見れるとなれば、喜ぶ人も多いのではないだろうか。

重要なのは、これらの試み自体が成功するかのみならず、そこから得られる反応をどれだけ生かせるか、である。アンケート用紙を配ることも効果的だろうが、回収されないアンケート用紙の中にこそ大事な情報が隠されていると考えなければならない。何が変わり、何が変わらなかったか。どのような人が加わり、どのような人が去ったのか。どこにどれだけずつどのようなものに対してお金が落とされたのか。そのようなことは調べようと思えば調べられることであり、誰もが共有できる情報のはずである。(もちろんこれらのことは、プライバシーが確実に配慮されるような形でなされねばならない。そのためのシステム作りも重要になってくるだろう)

インターネットによって人々の距離はある一面では近づけられた。しかし聞こえやすい声と聞こえにくい声という差があることにより、多くの人々の小さな声は遠くにあるままだと言える。一般棋士2.0にとって、その声をどこまで拾い上げるか、そしてその声の大きさにいかに惑わされないかが重要である。将棋が単なるブームとして終わらず、プロの世界が魅力あるものとして受け入れられ続けるには……その鍵を握っているのは、まぎれもなく多くの「普通の」棋士なのである。

半島→跳馬

将棋と短歌の技術交換会（暗黒地下無法闘技場編）

「とにかくなんでもいいから、音数を守って短歌をつくろう」の巻

「諦めんなよ！

諦めんなよ、お前！！

どうしてそこでやめるんだ、そこで！！

もう少し頑張ってみろよ！

ダメダメダメ！諦めたら！

周りのことと思えよ、応援してる人たちのことってみろって！

あともうちょっとのところがなんだから！」（松岡修造名言集より）

こんにちは、はじめまして半島です。

今回は将棋と短歌の技術交換！という企画にノって来てありがとうございます！！

これを機に将棋短歌詠み人口が増えれば……とか「べ、べつに考えてないんだからねっ！」

アタシ独りで短歌詠んでたって、寂しくなんか……。

何よその顔……。ふんだっ！

あっ……そんな顔しないでよ……。ねえ！ 悪かったってばあ……。

へ？ ～～～っ！！！！ もうアンタなんか知らない！！

はい、というわけでね。短歌短歌っと。

まずはじめに僕はちゃんとした短歌は教えられません。

お稽古ごとの短歌は歌壇受けもいいし、いろんな人に褒められます。

でも、そんなのは面白くないです！ もっとハジけましょう！！

「もっと熱くなれよ…!!

熱い血燃やしてけよ…!!

人間熱くなったときがホントの自分に出会えるんだ！」（松岡修造名言集より）

短歌は基本的に5 7 5 7 7の音の数でそろえます。

「っ」は一音、複合音「ピャ」「ティ」とかも一音です。

5 7 5までが上の句（かみのく）で、7 7が（下の句）ともいいます。

基本は音をそろえることにあり、句が5つ、つまり五重塔を建造することにより短歌は一本、すっと立ち上がるわけです。

エジプトの壁画みたいなグラタンをただのんびりと食べている夏（清水らくは）

エジプトの 5音

へきがみたいな 7音

ぐらたんを 5音

ただのんびりと 7音

たべているなつ 7音

このようにネッ！

まずは書いてみましょう。

「はじめは指で数えながらで大丈夫！」 ぶっちゃけ僕もたまに数える！！（苦笑）

君の短歌ロードは今日のはじまる！！ 跳馬社長！ 期待してますぜ！

っとその前に。

今回は一応禁じ手を指定しておきます。

「句切れ」という手です。

俳句でいうと

単位試験朝焼けの水とぶ蜻蛉（あきつ）とか適当に今作ってみました。

単位試験（名詞で終わる）
朝焼けの水（名詞で終わる）
とぶ蜻蛉（名詞で終わる）

すべての句で「切れ」を行う。つまりリズムを区切ってしまうのを俳句では「三段切れ」というようで、注意が必要だといわれています。

短歌には、五段切れ反則と言うルールはないですが、ツイッター短歌などをみると「/」スラッシュをいれて5句すべてを意図的に区切ってらっしゃる方が非常に多い。

文章は本来句をまたぐものです。そうですね、「5段切れの禁止」と指定しましょうか。（実際には5句すべてを体言で止めない、それだけでいいです）

しかしながら、私も真っ当な人間ではないのでコラムを楽しみにしておいてください。フヒヒもうすでに短歌について肩肘はっちまいましたか？

大丈夫。男は度胸、何でも試してみるもんさ。

「言い訳してるんじゃないですか？

できないこと、無理だって、

諦めてるんじゃないですか？

駄目だ駄目だ！あきらめちゃだめだ！

できる！できる！絶対にできるんだから！」（松岡修造名言集より）

跳馬さん、あなたは今日から富士山だ！！！！

跳馬→半島

どーも、こちらこそはじめまして跳馬です。

高校生の身分で将棋側を選んでいただいて、大変光栄です！これを機に短歌将棋指し人口が増えれ……とか「べ、べつに考えてな(以下略)

実は僕、短歌を詠んだことなんて殆どありません。それこそ学校の宿題ぐらいのもの。しかししかし、こんな機会はなかなかない。短歌自体には興味がある。よし、やれる分だけやってみよう！

という訳で先に短歌のお返事を済まします。幾つかやってみましたがとりあえず2句ど一ぞ。

振り駒を終えて礼して一呼吸かちり目が合いすぐに逸らした

決勝を見ている僕のため息と駒の音だけが空気を揺らす

テーマ「大会」という感じで。大会で負けた悔しさは大会で晴らすしかないということで、また次の大会頑張ります。特に団体戦で負けると、辛いものがありますね。この辺りの心情描写は清水らくは氏の「海の81マス」を(ry...このままですと、そちらは猛暑日こちらは冬日と異常気象もいいところです。

いよいよ将棋に入るので、そろそろテンション上げてせめて冷夏ぐらいにしましょうか。

さあさあ、将棋ですよ将棋！囲い方や戦法、手筋、詰将棋、駒落ちなどなど最初に何を教えるのかは人によって違いますが、ご要望にお応えしていきなり「棒銀」をお教えしましょう。

「棒銀」というのはその名の通り、飛車の前を棒のように銀が飛び出して攻める戦法のこと。

最たる狙いは銀と飛車の協力で敵陣を突破すること。将棋は、というか将棋に限らず何事も攻めですよ、やっば。ええ。

ただなかなか突破は難しいので、普通は攻めの銀と守りの銀の交換ぐらいに落ち着きます。

図抜きで説明するのは至難の業なので、図を添付で使わせてくださいな。編集長、面倒でしょうがごめんなさい！升目の表し方ですが、縦軸が漢数字で横軸が右始まりのアラビア数字です。

まず、飛車先の歩を突きます。つまり居飛車で戦うということですね。飛車を左側に動かして戦う場合もあります(=

振り飛車)。

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
							桂	皇	▲先手
						香			二
						馬	馬	馬	三
						馬			四
						歩			五
									六
					歩	歩	銀	歩	七
							飛		八
							桂	香	九

次に、右側の銀を飛車の前に出して攻撃参加させます(上図)。居飛車の場合は右の銀が攻めで左の銀が守りの駒です。ちなみに居飛車の場合、王様は基本的に左側にもって行きます。飛車の周りで戦いが起こるので、あらかじめ避けておくわけですね。勿論振り飛車の場合は逆。

そして仕上げに、仕掛けます(下図)。銀が取られそうですが、銀を取るとこちらは悠々と歩を2三に進めて成り込めるので大丈夫です。この時、2四の地点の駒の利きの数で勝っているのか確かめてから仕掛けるのが大事です。少々分かりにくいですが、ハ〇将棋なら「ガイド」で表示してくれるので、それを確認しながら指せば大丈夫だと思います。

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
							桂	皇	▲先手
						香			二
						馬	馬	馬	三
						馬	歩	馬	四
								銀	五
									六
					歩	歩		歩	七
							飛		八
							桂	香	九

この「数」という感覚は実はとても大事で、先ほど銀を取られても大丈夫だったのも2三の地点で数で勝っているからです。

これで成功。やったね。本筋は単純明快です。まあ細々とした変化は色々あるのですが、男なら気にせずにいきましょう！

ただ、難しいのはここからです。普通「攻めの銀と守りの銀の交換」が上手く行った時点で攻めは成功です。ただ、そこから勝つのはなかなか難しいかもしれません。

やはり一気に突破する楽しさが一番大切ですので、駒落ちでやってみるのも手です。

ハ〇将棋の駒落ちはやや特殊なので、2枚落ちでも棒銀で銀交換とかを介さずに直接破れます。そこからはまあ頑張ってください(笑)。あ、相手が飛車先を突いてきたら左の金を7八に上げて受けてくださいね。

ではでは...と、お互いに宿題を出し合うという企画でしたね。「ハ〇将棋と対戦してくれること」っていうのはセコいかw

詰将棋とか出すのが普通でしょうが、少し楽しさせてください

「将棋に関する質問を幾つか返信に書くこと」にしときます。もうなんでもありでどうぞ。これこそぞんとこいです

だからといってアレですよ、「好きな女流棋士は？」とか「いおたんの結婚に関して一言」とかダメですよ、ダメですからね。ああ、あと「ハ〇将棋と戦って困ったこと」とかも聞いたら嬉しいです。なかなか言葉にするのは難しいかもしれませんが、棒銀に関係なくてもまったく構いません。

実は松岡修造の熱いメッセージにこちらは皆川さんに化けて対抗しようかと考えていたのですが、どう見ても勝ち目ないので止めておきました。ではでは。

半島→跳馬

跳馬師匠へ

短歌をさらっと詠んできた.....だと.....

しかも相当こなれてらっしゃる。

俺なんか初めて詠んだときなんか.....ぐっ..... (現代詩出身なので相当苦労した過去あり)

.....まずは将棋任務報告からしますか。

ハ○将棋との対局結果ですが.....負けました。

うぐぐっ.....（ボロッ）

師匠の言葉の一つ一つをしっかりと思い出せていれば、こんなことには.....！

ナニコレ、すごい悔しい！

あの後も指してみたんですが、10敗目にしようやくガイド機能を発見したり、心が折れそうになったり、頭が真っ白になったり、とうとう心が折れたりしてました。自分の飛車が相手に届く前に自陣がとんでもなく炎上してます。

完璧にハムに遊ばれてます。泣きたい。

でも、修造さんは言っている。

ここで諦めるべき定めではないと.....（アキラメンナヨー！）

平手ではどうにも勝てそうにないです。

今度からは2枚落ちでがんばってみます。

宿題ですが、

やっぱり実際に戦ってみて「守り方が一切わかってないとお話にならない」ということを学習しました。

考えたら当たり前の話ですよ。

ということで

Q1. 守りってどうやればいいですか？

Q2. 将棋初心者はどういふことを練習するといいでしょうか？

Q3. 好きな女流棋士は？

Q4. いおたんの結婚に関して一言

Q5. 将棋が強いお姉さんは好きですか？

という質問を投げかけたいと思います。（3番と4番の意図を実はよくわかってない）

さて.....短歌ですが。ガチ口調で参りますね。

1. 振り駒を終えて礼して一呼吸かちり目が合いすぐに逸らした

2. 決勝を見ている僕のため息と駒の音だけが空気を揺らす

おそらく「駒の音」の読み方は「こまのね」ですね。

歌評行きます。

まず、1と2がそれぞれが対の歌になってますね。

阿から咩への連作とも見ることができます。

1首目に感じたのは弓の弦のように張り詰めた真剣さです。びんっとしてます。

波打つ激情は感じませんが、非常にしっかりとした線で、しかも鋭いですね。

2首目、前者が直線なら、こちらは曲線。無念のあまり息を漏らしたのでしょうか。

緊迫した場だということ意識できないくらい胸中はぐしゃぐしゃなのかもしれません。

（それでも駒の響きと同じくらいの音のため息を吐くのはオオモノというか、なかなか図太いともとることはできませんね）

「かちり」というオノマトペ（擬音）や「空気を揺らす」という表現にも見られるように、2首とも透明感があふれています。

私の歌は基本的に爆発を意識していますが、跳馬さん歌は「澄んだ」た意識が見受けられます。

多彩な詠み筋の一角かもしれませんが、この「澄み」はポイント高いですね。

技術評いきます。

1首目は動詞が非常に多いのがネックですが、将棋の対局直前の「一連の動作」として書かれています。

動詞の数を増やすのはひっじょーにアクロバティックなのですが、この歌は「セオリーをぶちやぶった好い例外」として機能していますね。好印象。

念のため無理くりケチをとばしてみますか。

まず、1番2番ともに初句の切れ方が「を」ですね。

対の歌である以上、比較された際の美しさも視野にいれると、より「澄み」ます。ぜひ、工夫してみてください。

これ以外はないなあ。

総評：

「音数を守って自由詠」の歌、実に見事。

音数を守るのは基本フォームです。

音韻がそろっていれば短歌に聞こえますし、骨組みが若干微妙でも五重塔は立ちあがります。

逆に強固な骨組みであれば、五重塔はバベルにも化けます。

これに対し、音数を崩すと「破調」という読み方もあります。

例を挙げますか。

- ・ 真っ青に冷めたビー玉ゆびさして「ねぶれよ、これが君の不幸だ」 (半島 音数揃え)
- ・ ねえさん 帯止めはまだ紅いだろう？ もっと、もっときつく結べよ (半島 破調)

著作権の関係上、拙作を引っ張りますが、フォームも崩し方次第で暴投にも魔球にもなりえるはずですが。ただ一方で、口語だからこそ音数は守るべきという人もいます。

五重塔を欠陥建築にしないための秘策、それがないと基本構造を変えるのは難しいのかもしれませんが。(歌がドSなのは気にしない方向で。たまにはこんなもんも詠みます)

余談ですが、歌の世界では自分で歌を解説することは基本的に「かっこわるい」こととされています。

一首の中にすべてを表現できなかった、もしくは伝えきれなかった時点で詠み手の力量不足ですから。(逆に相手が言いたい事を積極的に読みこむ評者もいます。懐に飛び込む感じですね。タイガーアパカッ！)

なので僕も自歌自注はいたしません。好きに読むがいいさ！w

あー、それにしても棒銀難しい。

なんかこっちの飛車が届く前に相手の飛車がぼくの陣を疾駆してたりしてます。

くやしいなあチクショウ。

跳馬→半島

こんばんは、再び跳馬です。

「往復」の本来の意味は「行って、帰る」ですから、三通で終わるのがきっと丁度いいのでしょうか。ですがこっちから質問をお願いしちゃったんで、もう一通書かなければならなくなりました(^_^);

まずは短歌から。

ええと、お褒めにあずかり大変嬉しいですよ。天にも舞い上がるような気持ちです。というか実際舞い上がりました。

言いたいことが上手く伝わるのか不安で短歌の下に微妙な補足を付けていたのですが、そういうの一切なしで勝負するのが短歌なのですね。あと、プロっぽいテクニック解説も大変勉強になりました。ありがとうございます。

今回は出来過ぎでしたが、また機会があれば頑張ります。

さて、次に将棋です。

返信、とても面白く読ませていただきました(笑) いや、よく分かりますよ。読んで理解して覚えてるつもりなんだけれども実践の場では何故かぶっ飛んでいる、と。まあ将棋に限った話ではありません。何度も意識して指していれば自然に覚えます。

では質問に答えましょう。というか無茶気味な振りに答えて下さってありがとうございます_(_)_

Q1. 守りってどうやればいいですか？

はい、一番最初に解説するべきだったかもしれませんね。すみません、一番の基本を教えます。

申し訳ないですが今回も図を使わせて下さい。この図は相手が飛車先の歩を突いて、歩交換した局面。この前に7八金と上がるのが大事というのは前回書きました。で、この次の手も大事。



相手が歩交換してきたわけですからこちらは歩を持っています。その歩を角の頭(8七)に打つのが欠かせないところ。逆に相手からここに歩を打たれると、ひどいことになるので受けておきます。

この手は応用範囲が広く、相手の駒が飛車でなくても、また先手の形が違って、そもそも盤上の違う位置であっても打つといて損のないところです。

あと囲い方とか今回は飛ばします。ハムの2枚落ちは無金無角なので、囲わずに棒銀で攻め倒した方が早いです。

Q 2. 将棋初心者はどういふことを練習するといふでしょうか？

難しい質問ですが、初心者向け詰将棋集（おススメは浦野真彦先生の「一手詰ハンドブック」です。これはピカイチ）を解いたり、簡単な戦法書（「棒銀」みたいな）を読む、など方法は色々あります。

これは人それぞれですが、まあのおんびりやるのが大切です。

Q 3. 好きな女流棋士は？

は一、やっとガチゾーンが終わりました。後はボケで終わりですw 女流棋士あんまりご存じないかもしれませんがお付き合いください。

存在や人となりで選ぶなら清水市代先生です。若手の目標であり高い壁であり、それでいて女流棋界を支えていますね。凛々しい対局姿もいいです。

そうですね、あと個人的には香川さんを応援しています。なんででしょうかね。

Q 4. いおたんの結婚に関して一言

「いおたん」といふのは室田伊緒(むろたいお)女流初段、将棋界の天使的立ち位置の方のことで、最近22歳という若さで囲碁界のエース・井山裕太と結婚されました。誕生年月日が一緒とかで、巷で云う運命ってやつみたいですよ。

まあ、あれですね。未永くお幸せに。

Q 5. 将棋が強いお姉さんは好きですか？

ええ、好きですよ。過去自分の周辺に存在したことはないですが。将棋部は男ばかりと相場は決まっています...

全国大会に行けば結構沢山いるらしいので、そういう意味でも次の大会頑張りますw ...多分こういう邪の心があるから勝てないんだろうなあ。

はい、また長文になりました。指す上で参考になれば幸いです。

素敵な企画に参加させていただいてありがとうございました。とても楽しかったです。

では、またの機会に。

お城はあきた



やってきた「虚」は
語り始めた



「過保護な国なので
外出できなかった



私は逃げ出した



その後すぐ、
祖国が滅ぼされた



成り駒の国で
虚しく過ごした」



相談した

帰ることにした



お城に帰った王様は
たまたま裏返った

でもまた飽きてきたなあ

我慢してください

おしまい

月子のチェス日記 「チェ的」

.....あ、お久しぶりです、月子です。

今回は、チェスがある程度指して見えてきた「将棋指しだからこそ間違えやすい点」について検討してみようかと思います。

☆さばいちゃダメ

どうしても序盤から駒交換をしてしまいたくなります。局面をほぐしていくせがついてるんですね.....。でもチェスは駒が減っていくので、どんどん難しい局面になってしまいます.....。さて、そんなわけで.....

☆ポーンの使い方がわからない

気が付くとポーンしか残っていない、という局面がいっぱい出てきます。そこからはどのようにしてポーンをクイーンにするかの勝負なんですが.....これがよくわかりません。ポーンだけの局面ではほとんど負けています.....。

☆クイーンに翻弄される

クイーンは将棋にはない、とても動ける駒です。しかもチェスの方が盤が小さいので、威力は計り知れません.....。縦にも横にも動けるので、駒得していても突然飛び込まれてチェックメイトということも。将棋なら間駒を打てるので、その点でも盲点になりやすいですね.....。

☆ナイトの利きをうっかり

ナイトは八方桂とも呼ばれ、将棋の四倍動けます。あっち行ったりこっち行ったり、利きをうっかりすることが多いです。チェスをしている人は、将棋の桂馬には物足りなさを感じるでしょうね.....

☆ルークが隠居する

チェスには金銀がありません。キャスリングした後キングに寄り添うルークは守りのかなめです。だからどうしてもその場から動かせないんです.....。反対のルークばかり動かして、結局横のルークが逃げ道を塞いでいたり.....。

☆ステールメイトがわからない

将棋だと、「もう指す手もないでしょう、投了しなさい」という勝負があります。完封というのですね。ただチェスの場合駒がなくなっていくので、「本当に指す手が無い」局面が出てくるんですね。「さあ、投了しなさい」と思ったら、これはステールメイトで引き分け.....なんということでしょう.....

☆一発狙いにはまりやすい

将棋でも奇襲はありますが、まあそんなにひどいことになる戦法は少ないです。でもチェスの場合、序盤からビュンビュン駒を飛ばしてくる方が結構いて、罠にはまることが多いです.....。思うに、金銀と言った守り駒がなく、攻める機動力に対して柔軟な守備力のないゲームなんですね.....。

☆ルークに目がくらむ

相手の動いていないルークを取っている間に、攻められて苦戦することが.....。将棋でも遊び駒を相手にするのは筋悪ですが、どうしても「飛車を取る」感覚なんですよ。でも実際には持ち駒にならないので、遊び駒を取るのは将棋以上に響かないという.....

もう少しレベルアップしたら、まだまだ見えてくるものがあると思います。それではまた次回。

「エクストリーム・詰将棋 福岡城編」 跳馬

福岡随一の花見スポット、福岡城跡にやってきました。



中は城跡というより、桜の多い広場といった感じ。桜にはまだ早いですが。

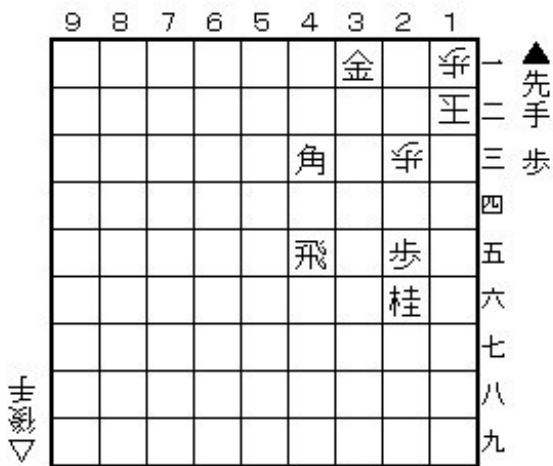


できたてのむつごろう焼き頬張って四百年の歴史に座る



実はここで一から考えて上手くいく自信が無かったので、家で簡単な原案（上図）を作ってきました。

...そもそも原案に余詰があることに気付いたり。で、下が完成図。



11手詰。

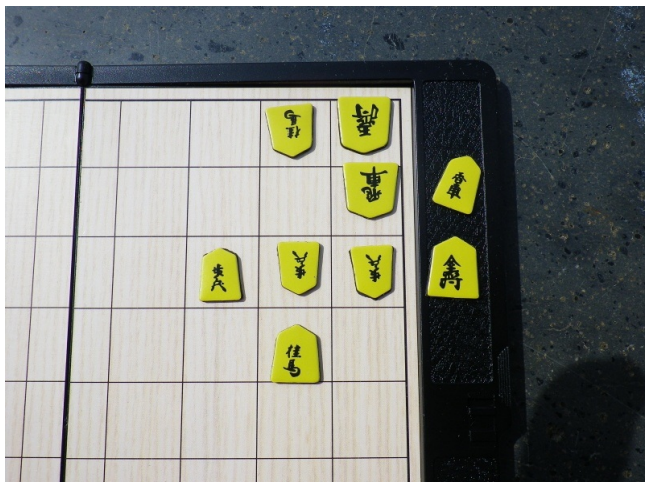
熊本市の憩いの場、江津湖の公園へ。



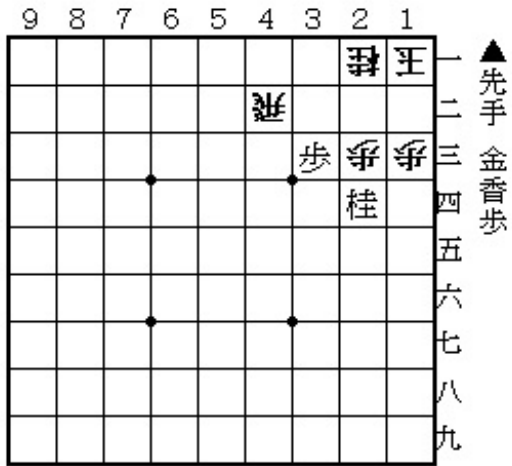
湖を眺めるベンチに座り。水鳥なども見つつ。



.....実は詰将棋が苦手。まぎれのないものしか.....



修正して完成しました。



9手詰。

解答はあとがきで！



短歌将棋

どうも、ついに表紙を勝ち取った皆川です。

いつも負けちゃう金本さんに代わって、今回は私がぜいらむさんに挑んだんだけど、ちょっと妙なことになったのよね。

まあとりあえず、見てみてね。

ルール 『駒.zone』の企画で、皆川さんとぜいらむさんが対局します。駒を取るときと打つとき、皆川さんは短歌を詠まなければいけません。

ぜいらむ 皆川さんが70手以内で勝てなかったら、ぜいらむに真っ赤なニーソックスを献上する、というのはどうだろう？(´▽`)!

皆川 噂通りの人ね……。じゃあ、70手以内に勝ったらその真っ赤なりポンを貰おうかな。

ぜいらむ これ、実はりボンじゃなくて禪なんだよ？

皆川 それ、ど変態じゃない！

初手から

▲7六歩 △3四歩

▲2六歩 △8四歩

▲2五歩 △8五歩

ぜいらむ 横歩取りって駒がいっぱいぶつかりそうで楽しいよね？

▲7八金 △3二金

▲2四歩 △同歩

▲同飛 歩くとき二人の歩幅違うから立ち止まる数増やしてほしい

△8六歩

▲同歩 誰かから譲り受けてる目標は歩いて行けぬ遠さにあった

ぜいらむ 皆川さん……綺麗だよ…………… (短歌が)

皆川 ま、まあ当然じゃない。

△同飛

▲3四飛 盤上で決着ついた二日後に五十歩百歩を笑い合いたい



△3三角

▲3六飛 △2二銀

▲3八金 △8四飛

▲8七歩 この世界賭けてもきつと報われぬ歩合悪いと友が去り行く

ぜいらむ そろそろネタに困ってここで「5八玉」とかすればいいのに。ぽんぽん短歌が出てくるとハンデにならねえー(；Д；)

△2四飛

- ▲2八銀 △4一玉
- ▲5八玉 △5一金
- ▲7七角 △6二銀
- ▲7五歩 △8四飛
- ▲8八銀 △5四歩
- ▲8六歩 △5五歩
- ▲8七銀 △5三銀
- ▲7六銀 △5四銀
- ▲8五歩



- △8二飛
- ▲3九銀 △8三歩
- ▲4八銀 △5二飛
- ▲8七銀 △4二角
- ▲7六銀 △3三桂
- ▲2六飛 △7四歩
- ▲同歩 深夜二時相入玉の指し直しベテラン先生『歩歩歩』と笑う
- △7五歩
- ▲8七銀 △6五銀
- ▲9五角 △7四銀
- ▲2四歩 歩数だけ自慢しているあなたには丸い地球がお似合いみたい
- △2五歩
- ▲4六飛 △6一金
- ▲3六歩 △9四歩
- ▲7七角 △8五銀
- ▲3五歩 △5四飛
- ▲3七桂 △7三桂

ぜいらむ 何とか70手は行きそうな気がするので、皆川さんの脱ぎたてニーソをくんかくんかすることは出来そうだ！
 皆川 悔しい.....投了しなさい！

- ▲3六飛 △4四歩
- ▲3四歩 △4五桂
- ▲2五桂 突然にウソがばれてしまったら一歩の距離も数日がかかり
- △6五桂
- ▲6六角

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	▲			▲	▲	▲			▲	▲
						▲	▲	▲		▲
		▲	▲							▲
	▲			▲	▲	▲	▲	▲		▲
▲		▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲		▲
			▲			▲				▲
		▲		▲	▲	▲	▲			▲
		▲				▲	▲			▲
										▲
										▲

△2四角

▲3三歩成

ここでトラブル発生。対局を行っていたシステムが「△5七桂右成」を認識してくれず、どうしても次の一手が指せなくなったのよね。というわけでここで指しかけに。

ちなみにこの局面.....私が苦しいよね.....

次こそは駒.zone編集部でぜいらむたんに一矢報いたいと思うわ。



rapier pendant



あとがき

出ました第四号、そして一年以上続けました。

今回は意外な寄稿者もいて、盛り沢山な中身になったかと思います。将棋ファンから執筆者へという流れができてきて、嬉しい限りです。

そして半島さんがだんだん将棋に詳しくなっていくのも、見ていて楽しいです。駒.zoneが将棋と文芸をつなぐ通路のような役割を担っている気がします。

今回いろいろと悩んだんですが、「駒箱の鍵」というこれまでとは違ったタイプの書き下ろしを載せてみました。長編にでもできるようなネタなのですが、「実現する前に発表を」と思い急いで書きました。これまでも小説に書いたことが数か月後に起こるようなことも多く、あのような団体戦ができたらいいな、と思っております。

次号も……出します！ 皆様、今後もよろしくお願いいたします。

エクストリーム・詰将棋の答え

跳馬作

▲2一角不成 △2二玉 ▲4二飛成 △1三玉 ▲1二龍 △同 歩 ▲1四歩 △2二玉 ▲3二角成 △1一玉 ▲2一金まで

らくは作

▲1二歩△同飛▲同桂成△同玉▲2二金△同玉▲3二飛△1一玉▲1二香まで

参加者紹介



清水らくは

実は昨年末に『詩と思想』の読者投稿欄年間最優秀作に選ばれたので、詩作に関してはちょっと緊張しました。ただ、相変わらず全体的には色々やりたいことをしてみました。『駒.zone』も二年目に突入ですが、本当にこれは皆様のおかげです。ありがとうございます。



半島

カキフライは正義。異論は認めん。

さて、このあとがきを書くのももう早いもので4度目です。

将棋か.....以前はまったく接点なかったのですが.....

これもまた「導かれた禍蛇の理（うんめい）」というものでかね。

ハッ！ まったくもって御しがたいものだ、この世は.....いや「五月雨の叙事詩（じんせい）」とでもいいますか.....

だが私は抗いますよ！ フハハハハ！ そうだ、こんなものを試練などとは呼ばないっ！ 認めんよ！

さあ、刮目して見たまえ！（主に記事を）

「アカシツレコード（跳馬さんの将棋指導）」にアクセスした私はついに「インドラの矢（棒銀）」を得た！

神の怒りだ！ あの「暁の愚者（将棋の強いげっ歯類）」に我が覇道を見せつけてくれるッ！

.....いや負けましたけどね。負けましたけどね——！

そうそう最近ハッシー先生をようやく知ったんですよ。めちゃくちゃ強そうなオーラが漂っておられました。

いや、実際めちゃくちゃお強いんでしょう。げっ歯類さんの棋力（戦闘力）を1としたら、先生は53万でしょうか。

（.....ドドリアさんとザーボンさんはどなたか）

そういえばハッシー先生がニコニコ生放送で「山崎（ウイスキー）」を美味しいと仰ってました。

ダイタンな.....先生ってなんというか魔王っぽい？（←失礼） えーと、うん、ウイスキーはおいしいですよっね。

まー.....「酒は呑んでも呑まれるな」ってね！ ファイトです！

shogi-bar行ってみたいなあ



まるぺけ

今号は皆川許心さんイチオシです。茶髪なのは仕様になっております。ワンピースの裾が短いのも仕様です。ナマ足なのも勿論仕様です。今号の七割未満の内容とは関係ない（たぶん）ですがコンセプトは「春は恋の季節よ☆」



跳馬(Keishogi)

どうも。色んな意味でなんとも濃いメンツの揃っている「駒.zone」執筆陣にまぎれこんでしまった、一人の青年です。

今回の企画には、半島先生のリードもあって楽しく参加することができました。

文書で将棋を教えるというのは初めての経験で、至らない点多々ありましたがご容赦ください。

そして、短歌は大変面白かったです。企画は次回に続く、かも！？...ま、画像はアレです、鳥取砂丘です。なんかすいません。



にゃんこむすめ

らくはさんが「どうしてもにゃんこの尻尾を見たいんだよ！見せてよ！」って言うから、思い切って尻尾（ていうかお尻？）の写真を公開したのにやっ//

ところで.....にゃんこむすめは月子さんのチェスの師匠なのに！チェスのコーナーに出番がないって.....どうということなの！？



ぜいらむ

今回は短歌将棋に登場させていただきました。

しかし本当にハンデになってるのかどうか疑わしいぐらい皆川さんの読みと詠みが鋭くて。

皆川さんは素敵で無敵です。

みつめあいながれるよわの月あかり もっとふたりで 指して みたいな

という感じにラブコールしてみたので（出来るはず。出来る？）、次号では皆川さんが

「取った駒をネタにぜいらむへの愛を歌う」そんな後半戦をお願いします。

ところで、中盤の構想についてアドバイスくださった方（まあソムリエなんですけど）ありがとうございました。実はあの助言でかなり助かりました（笑）

。



しゅう

最近リアル社会のハードルが格段に上がってしまった辛さを感じつつも、そのハードルを乗り越えられるんじゃないか？と思う出来事もあったので、かなり調子に乗ってます。（アイコン作：こいなぎ (@doinagi135) 様）



ふりごま

お初にお目にかかります。

将棋小説を書くつもりがエッセイみたいになってしまいました。

とはいえ、貴重な一步を踏み出すことができたのは、らくは編集長のおかげです。

『一步千金』・・・1枚の歩を大切にする教えですが、最初の一步もまた大切ですよね！



shogitygoo

「ものぐさ将棋観戦ブログ」という将棋ブログを書いています。今回は小説に挑戦してみました。



若葉

「なんですか急に、『眼鏡を取れ』だなんて...? (全然見えない)」

今号もお声を掛けて下さりありがとうございます。駒娘描くのとても楽しいです。

銀ちゃんは自己満。めがねっこの素顔ちらりたまらん。



ikkn

はいはい、音声研究者の私ですがコンピューター将棋ソフトの中身の一部をシンプルな式にしてみましたよ。こういうのを組み込んだのがボナンザです。いやー、強そうですね。

$$w_i(n+1) = w_i(n) - \alpha \frac{\partial E}{\partial w_i(n)}$$

編集長 清水らくは @rakuha

広報 金本月子 @tsukiko_sann

営業 皆川許心 @MinagawaMotomi

写真提供 紫野

ブログ 駒.zonecom

Google+ 駒.zoneページ

メルマガ 駒.zone通信



MoonHeart

- 1 きっとまた五割一分
- 2 パントマイムハート

01. きっとまた五割一分

晴れか雨かわからない
そんな予報でも出かけた
願えば少しだけ叶う
晴れる確率計算して

五割以下なら
ポニーテール
五割超えたら
ツインテール

虹が出るかわからない
そんな雨上がりがりでもきっと
願いが届いてほしい
晴れた空の下で笑って

五割以下なら
アイスコーヒー
五割超えたら
ホットコーヒー

本当は全力で
つかみに行けば
確率なんて超えて
会いに行けるけど

五割以下なら

五割以上なら

五割以下なら

五割以上なら

02. パントマイムハート

届かないところ
気付かない心
隠し通せるくらい
上手く演じてる

私と君の間
無いはずの壁を
上手く見せてるでしょう
寂しくなるんだけど

通り過ぎる影になら
言えるかもしれないけど
指先から震えてる
想いは駒箱の中に

届けたいときに
傷ついたらふりで
変われないままじゃ
上手くいかないね

私と君との間
会いたい気持ち
上手く消えてくれない
寂しくてこわくなる

電話ならばいいのかな
言える言葉探して
指先で描いてる
想いは演技じゃない

通り過ぎる影になら
言えるかもしれないけど
指先から生まれてく
想いを駒に乗せたいな

MoonHeart:
TSUKIKO KANEMOTO
MOTOMI MINAGAWA

Words: RAKUHA SHIMIZU
Music: UNDECIDED
Photo: RAKUHA SHIMIZU

(作曲者募集中！)



駒. zone vol. 4

君が絶望して
駒をこぼした時に
拾ってくれる人の数だけ
幸福は渦巻いている
一つ誓ってくれ
命を懸けるんじゃない
あれは別の競技場だ
こちらで楽しむもう
駒台にある歩の数を
必ず覚えておくどい
何度も確かめるうちに
心はリンクされる
君が絶望して
駒をしまう時も
誰かが待つている
これは幸福なゲームだ

(一般競技場清水らくは)